switcher!!

ちろ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その男は世界一速く、世界一力が強く、世界一硬く、世界一……。

この世界には個性というものが溢れており、それぞれ力が強いもの、素早く動けるもの、ただ単純に強いものなど様々である。

そんな中、すべての力という力で世界一のヒーローになろうと努力する少年がいた。

これは、世界一切り替えが早い男の物語。

目次

第１話　世界一切り替えが早い男　1
第２話　合格通知　8
第３話　世界一登校が早い男　14
第４話　個性把握テスト　21
第５話　初のヒーロー基礎学　29
第６話　第二戦、ＶＳ轟焦凍　36
第７話　委員長は誰だ！　42
第８話　ＵＳＪにて　49
第９話　戦闘、火災ゾーン　55
第１０話　人間砲弾　61
第１１話　迫る体育祭　68
第１２話　第一種目、障害物競走　75
第１３話　第二種目、騎馬戦　83

第1話　世界一切り替えが早い男

「今日は俺のライブへようこそー!!エヴィバディセイヘイ!!」
　プロヒーロープレゼント・マイクの声に、バッと両腕を上げて「ようこそー!!」と叫ぼうとしたその時、違和感に気づく。周りが誰も腕を上げていないし、そもそも若干引いている。腕を上げてレスポンスしようとしたのは俺だけで、明らかに浮いていることに気づいた。周りからの冷たい視線が突き刺さる。恥ずかしい！
　しかし、これは俺がいつもの調子で挑めているという証拠。気にしない。俺は世界一切り替えが早い男。
「こいつはシヴィー!!受験生のリスナー！」
　そりゃそうだろ。みんな天下の雄英に入りたくてここにきているんだ、緊張しないわけがない。そんな状態でレスポンスできる人間がどこにいる。俺すら周りの視線にやられてできなかったんだ。うわ、俺プレッシャーに弱くない？
　そんなことはない。現に俺は全く堪えておらず、余裕ですらある。
「実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!!アーユーレディ?!」
　実技試験の内容をざっくりいうと、こうだ。
　持ち込み自由な１０分間の模擬市街地演習を行い、そこで攻略難易度によってそれぞれ１、２、３のポイントを割り振られた仮想敵を行動不能にし、ポイントを稼ぐ。そして各会場に1体０ポイントの仮想敵がおり、そいつは大暴れするお邪魔虫らしい。０ポイントなら別に取りに行かなくてもいいだろう。
「俺からは以上だ！最後に我がリスナーへ我が校〝校訓〟をプレゼントしよう!!かの英雄ナポレオン＝ボナパルトは言った！『真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者』と!!Ｐｌｕｓ（更に）　Ｕｌｔｒａ（向こうへ）!!それでは皆、良い受難を!!」
「かっちょいい……」
　あまりのカッコよさに声が出てしまった。かっこいいではなくかっちょいいと言ってしまう程かっこよかった。更に向こうへ。乗り越えていくヒーローのためにある言葉だ、俺に相応しい。

ヒーローはどこのヒーロー科でもなれる。だが、最高の経験をするためには雄英に入るしかない。最高峰の仲間に囲まれて成長することで最高のヒーローに近づくってものだろう。

「っし！」

俺は一発気合いを入れて会場へと向かった。

会場は本当に街に見えた。所狭しと並び立つビル群は受験生を見降ろしているようにも見える。事実俺は敷地内にこんなものをポンポン作る雄英の財力に見降ろされていた。母さんが見たらどう思うことだろうか。きっと「私たちの未来を守ってくれる子たちですもの。それぐらいしないと」と理解ある態度をとるに違いない。流石俺の母親、世界一理解のある女。

受験生の様子は様々だ。余裕ぶっている者、気を落ち着かせている者、落ち着くどころかガチガチになっている者。ただ、ほとんどの受験生は個性にあった装備をしている。準備は万端ということか。俺何も用意してないのに。まぁ、俺の個性は装備があるとむしろ動きにくくなって邪魔になるのだが。

視界の端では、先ほどの説明の時にメガネの子に注意されていたもじゃ毛の子がまたも注意されている光景が映っている。受験生と言ってもその個性は様々なのだろう。あ、これは能力的な個性って意味じゃなくてね。

ただ、どれだけみっともない姿を晒していてもその人の個性はわからない。とんでもなく強い個性かもしれないし、個性が強くなくても気持ちはめちゃくちゃヒーローなのかもしれない。気持ちじゃどうにもならないのが辛いところだが、そこは仕方ない。俺は世界一切り替えが早い男。

ともあれ、同じ受験生であろうと合格すれば俺の学友も当然。俺は心の中でもじゃ毛にエールを送った。死んで骨になる前に俺がどうにかして助けるから安心して暴れてくれ、と。

一番最悪なのがもじゃ毛が受かって俺が落ちるということだが、俺

が受からないということはないので「ハイスタート!!」それはない。
今何て言った？
「どうした!?実戦じゃカウントなんざねえんだよ!!走れ走れぇ!!」
「確かに！」
何人かの呆けている受験生を置いて、俺は個性を使って走り出した。
個性は『スイッチ』。あらゆるモードにスイッチし、そのモードに合わせた力を発揮する。今の俺は、
「スイッチ。モード『ｓｐｅｅｄ』！」
モード『ｓｐｅｅｄ』。このモードになった俺は世界一速くなる。その代わりに通常よりも力がなくなり、また耐久力も激減する。スピード特化の危ない暴走野郎ってとこさ。ダセェ。
「標的捕捉、ぶっ殺す！」
「物騒だなオイ！」
目の前に現れたのは確か1ポイントの仮想敵。速いが脆い。ただいざ目の前にしてみると結構デカい。対抗手段がなければ足が竦むことだろう。しかし俺には対抗手段がある。
「スイッチ。モード『ｐｏｗｅｒ』！」
モード『ｐｏｗｅｒ』。このモードになった俺は世界一力が強くなる。その代わりにめちゃくちゃ移動が遅くなる。このようにモード『ｓｐｅｅｄ』からスイッチしなければ使い物にならない。
ただ、その破壊力はまさに世界一！
「パウワァァァァ!!」
右腕の一振りとともに1ポイント仮想敵を木っ端微塵に破壊し、決めポーズ。この瞬間俺は世界一カッコよくなる。そんなポーズを決めている俺の視界に、後ろから仮想敵に襲われている受験生の姿が！
「こりゃいかん！スイッチ。モード『ｓｐｅｅｄ』！」
ごつごつの体になるモード『ｐｏｗｅｒ』からスリムになって元からカッコいい俺がもっとカッコよくなってしまうモード『ｓｐｅｅｄ』にスイッチし、すぐさま駆け付ける。一瞬でたどり着いた俺はすぐさまモード『ｐｏｗｅｒ』にスイッチし、

「パゥワァァアアア!!」
「えっ、何!?」
仮想敵を粉砕した。流石俺、世界一切り替えが早い男。
「危なかったな！俺がいなきゃめちょんめちょんだったぞ！」
「めちょんめちょん!?あの、ありがとうございます！」
「気にすんな！お前も頑張れよ、未来のヒーロー！」
そして俺は世界一切り替えが早い男なので、モード『ｓｐｅｅｄ』になり次の仮想敵を壊しに行く。背後から「あのポーズとる意味はなんなんだろう……」という声が聞こえたが、カッコいいからに決まっている。このロマンがわからないとは、まだまだだな、もじゃ毛。
索敵、破壊、ポーズ。索敵、破壊、ポーズと繰り返していたら、いつの間にか結構時間が経っていた。そしてスイッチのし過ぎによる体への負担が結構やばい。途中から仮想敵が集まっていればモード『ｐｏｗｅｒ』で移動し破壊していたが、あのモードはめちゃくちゃ遅いのでどうしてもモード『ｓｐｅｅｄ』にスイッチしなければならなかった。この負担がなければ最強の個性なのに、惜しいぜ。
「４５ポイント！」
しかしやはり俺の個性は最強の個性だと持ち前の世界一切り替えが早い切り替えで思考を切り替えていると、メガネの子がポイント数を口にしながら仮想敵を壊していた。そういえばポイントカウントするの忘れてたなぁとぼんやり考えつつ、メガネの子が俺の世界一速いはずのモード『ｓｐｅｅｄ』より速いのではないかと考え始める。あと切り替え切り替えうるせぇと心の中で自分に文句を言った。
「まぁ世界一速くなればいいだけのことか！」
俺は世界一切り替えが早い男。今は劣っていたとしてもいずれ越えて見せる。あれだ、Ｐｌｕｓ　Ｕｌｔｒａ　ってやつ。
「スゥピィィイイドォォオオ!!」
そして速さを見せつけるかのように街を走り回る。どうだ、俺は世界一、いや今のところ世界二速いだろう?あ、隣にもじゃ毛。こんにちは。どう?俺世界一速くない?
そう声をかけようとした瞬間、地響きとともに巨大な何かが現れ

た。
「でか」
　あまりの驚きに平坦な調子で二文字の言葉を発してしまった。あんなの倒せるの？いや、そもそも倒さなくていいんだっけ。０ポイントですものね。よし逃げよう。隣のもじゃ毛もめちゃくちゃビビってるし、抱えて逃げよう。さぁ行こうぜもじゃ毛。ところで君何ポイント？と聞こう、
「いったぁ……」
　とした、その時。逃げようとしてこけてしまったのか、倒れている女の子の声が耳に届いた。このままではあのドデカ０ポイント仮想敵に踏みつぶされてしまうかもしれない。じゃあどうしよう。あのデカいのをモード『ｐｏｗｅｒ』でぶっとばす。いや、できなくはないかもしれないが負担がひどくなる。なら女の子を抱えて逃げる。それはいいが、このもじゃ毛は？流石に二人抱えて逃げられるほどモード『ｓｐｅｅｄ』は頑丈じゃない。かといって普通のモードで二人抱えて逃げられるか。まぁやるしかないか。
「お？」
　そこでふともじゃ毛の顔を見ると、何かイカした目をしていた。ふむ。
「もじゃ毛。アレ倒せるの？」
「もじゃっ、いや、あの」
　声をかけるともじゃ毛はしばらくもごもごした後、再びイカした目で俺を見て、
「うん」
　と頷いた。
「よっしゃ！ならやったれ！あの女の子は俺に任せろ！」
「う、うん！」
「女の子に触れなかったからって後で文句言うなよ！」
「言わないよ！」
　ったく、シャイボーイめ。なんかめちゃくちゃ跳んだし。アレほんとに人間か？なんであんなのあったのにビビってたの？

「いやいや、そんなこと考えてる場合じゃない」
女の子を助けなければ。俺は世界一切り替えが早い男。
「よっしゃ、逃げよう」
ごめんねー、と言いながらお姫様抱っこをする。世界一カッコイイ俺にお姫様抱っこされてこの子もさぞかし喜んでいることだろう。お礼？いいさいいさ。それならあのシャイボーイに言ってあげてくれ。
「待って！あの人、着地はどうするん!?」
「あ。まぁあんなに跳んでしかもいつの間にかデカい仮想敵をぶち壊してるくらいだし、大丈夫なんじゃね？」
「っっっでええええええ!!!?」
そうは見えない。めちゃくちゃ痛そうにしている。
「やべぇどうしよ！」
「私をあの人のとこまで投げれる!?私の個性は手で触れたものの重さをゼロにして、浮かすことができる！あの人に触れれば助けれんねん！」
なるほど、世界一重さがなくなるわけね。そりゃまた世界一の個性。しかし、俺には負けるね。
「わかった！しかし女の子を投げるような教育を受けてきてないもんでね！しっかり掴まってな！スイッチ。モード『ｊｕｍｐ』！」
モード『ｊｕｍｐ』。このモードになった俺は世界一跳べる。その代わりに足が「跳ぶこと」以外一切できなくなる。まさにモード『ｊｕｍｐ』！
「俺の個性はあらゆる分野で世界一になれる！ちゃんと触れよ！」
「触った！」
バチン、という痛そうな音が聞こえた。どうやらもじゃ毛より高く跳んでしまったようで、その途中で触ったらしい。もしかしたらめちゃくちゃ痛かったかも。ごめんねもじゃ毛。俺が世界一跳んでしまったばかりに。
「よし、じゃああとは君の重さをゼロにしてくれ」
「え、そのままやったら落ちてまうけど」

「大丈夫だ、信じろ！」
いい笑顔で言うと、女の子は「吐いてもうたらごめんな」と怖いことを言って自分に触れた。その怖さの真実を確かめる間もなく落下を始める。普通のやつならば大怪我するところだろう。普通のやつならば！
「スイッチ。モード『ｈａｒｄ』！」
モード『ｈａｒｄ』。このモードになった俺は世界一硬くなる。ただしこのモードになると一切動くことができなくなる。更に部分的な使用はできない。ただひたすらに硬くなるだけだ。
そして世界一硬くなった俺と、口元を抑えて「うぷっ」と不吉な声を漏らしている女の子は無事着地、着弾？した。地面が凹んでめちゃくちゃ背中が痛いが、俺は今世界一硬いので叫ぶことすらできない。このモード、骨は折れないし血もでないけど痛いものは痛いんだよね。
「っ、ふぅ。助かったぞ。降りてくれ」
「、ごめ」
「は？」
その瞬間、俺は世界一臭くなった。「世界一はひどない？」と元凶に文句を言われたが、うるせぇと一喝しておいた。

第2話　合格通知

「直談判？」
「そ！あの人最後の方に『せめて1ポイント』って言ってたから、まだ0ポイントなんやないかって思って。私のポイント分けられませんかって言いに行く！」
　世界一臭くなった俺の学校指定体操着から制服に着替え、先ほどもじゃ毛とともに助けた女の子……麗日お茶子と並んで歩いてると、お茶子ちゃんが息巻いて「直談判する」と言い出した。あの人というのはもじゃ毛のことだろう。倒れている人を助けるためにデカい仮想敵をぶっ飛ばしたあのもじゃ毛。モード『ｐｏｗｅｒ』の俺より強くない？
「別に必要ないと思うぜ。ほら、あんなに世界一アツいやつが不合格なわけねぇって」
「何の根拠にもなっとらんくない？」
「だいじょーぶだって！行くなら止めねぇけど、誰かを助けるために0ポイントとはいえ仮想敵をぶっ飛ばしたんだ。温情かなんかですっげぇポイント貰ってるさ」
　楽観的な俺に、あの人にポイントを！と気合いを入れるお茶子ちゃん。対照的に見えるが、もじゃ毛が受かるべきだって思ってるのは同じだ。ほら、あんな場面で人を助けるやつをヒーローと言わずして何て言うんだ？もじゃ毛はあの瞬間まさしく世界一のヒーローだったね。俺には負けるけど。
「うーん……でも、やっぱり行ってくる。私のせいで0ポイントになるんかもしれんって考えたら行かずにはおれんよ」
「そうか。ポイント分けた結果受からんかもしれねぇぞ？」
「だいじょーぶ！」
　お茶子ちゃんは俺の隣から前に出て、ピースサインを向けて笑った。
「私、受かるから！またね、須一くん！」
　おう、また。と返す前に元気無重力ゲロガールは去っていってし

まった。さっきまでぐったりしていたのに、若さの神秘というやつだろうか。俺はまだ元気になれそうにない。やはりスイッチのし過ぎだろう。中々限界だったところに最後のモード『ｊｕｍｐ』とモード『ｈａｒｄ』へのスイッチで完全に体が疲れたと言っている。

ひとまず母さんに「受かったヨ」とメールを送り、帰路につく。俺の家は雄英からそこまで離れていないので徒歩で十分だ。電車通学に憧れていた俺からすれば残念なことこの上ないが、雄英に通えるならばこれ以上の贅沢はないだろう。

「お」

「あ」

脳内で華々しい雄英ライフを描いていると、目の前に親の顔よりも見た、というか親そのものがいた。我が母、世界一理解のある女。須一一華（すいちいちか）である。

「心配で迎えに来ちゃった！」

「この俺に？心配？俺は世界一だから心配することないぜ」

「そりゃ母親だし。心配するよ」

「ありがとうございます」

心配することないと言ってみたが、そりゃ母親だもんね。心配するよね。ここは素直に礼を言っておこう。俺は世界一切り替えが早い男。

すっかり身長を追い抜いてしまった母親と肩を並べて家に向かう。中学の友だちはうちの母親のことを美人だとかなんだとか抜かしやがるが、俺から見ると確かにそう。そうなのかよ。

まぁ、俺の母親なのだから美人なのは間違いない。なにせ俺は世界一容姿が整っている男。ということは父さんもイケメンだ。まさに美形一家。道行くガールたちの視線が痛いぜ。

「一成が受かったって言ってるんだから、ちょっと早いお祝いしないとねー」

「お、じゃあ世界一うまい寿司が食いたい。今そんな気分！」

「って言うと思って、お父さんが『世界一うめぇ魚とってくらぁ！』って言ってとってきて、もう家でさばいてます」

「以心伝心？」
流石俺の父さん。世界一理解が早い男。というかうちの父さんヒーローだぞ。魚とってさばいてる暇あるの？街の平和は？
俺のために魚をとってきてくれることは嬉しいが、街の平和を思うと微妙な気分になりつつ家に帰ると、世界一うまい寿司が待っていた。微妙な気分は吹っ飛んだ。俺は世界一切り替えが早い男。

一週間後。リビングでごろごろしていた時、それはきた。
「一成ー。合格通知きてたよ」
「お。見る見る」
どうやら雄英から合格通知が届いたらしい。まぁどうせ合格しているだろうから見る必要もないのだが、一応ね。
？
「合格通知？」
「合格通知」
「見たの？」
「見てないけど」
「？」
「???」
母さんが合格通知と言って渡してくれたものを見る。それは一枚の封筒で、確かに開封はされていない。それなのになぜ「合格通知」と言ったのだろうか。「合否結果」じゃないの？母さんもしかしてエスパーなの？
「じゃあなんで合格通知って言ったの？」
「え、だって合格してるんでしょ？」
「あぁそうだった。俺合格してるんだよ」
なんだ、そういうことか。確かに俺のようにスーパーな世界一ボーイが合格していないわけがない。受験当日にも「受かったヨ」とメールを送ったじゃないか。俺は世界一うっかりな男。
「じゃあ見るわ」

自分の部屋に戻るのもめんどくさいので、その場で封筒を開ける。きっと「あなたは素晴らしい。ぜひ雄英に、いや、ぜひすぐプロヒーローになってください！」と雄英教師陣が土下座している映像が映し出されることだろう。そんなそんな。頭を上げてください。

しかし、投影されたのは俺を差し置いてＮｏ．１ヒーローをやっている、

『私が投影された！』

「オールマイトだ！」

「父さんの商売敵！世界一ヒーローな男！」

オールマイトは父さんが目の敵にしている。というのも、「俺が世界一なはずなのに、なんであいつがＮｏ．１やってるの？」という純然たる疑問からだ。俺から見てもオールマイトの方がすごいのだが、父さんが世界一であるということも事実。ということは市民の見る目がないのだろう。俺が今プロヒーローをやらずに学生の身に甘んじているのもそのせいだ。決して実力がないからではない。決して。

『ふふ、なぜオールマイトが!?という顔をしているね！』

「まぁ雄英に勤めることになったからとかだろ」

「むしろそれ以外ないよね」

『私が雄英に勤めることになったからさ！』

決めポーズをとっているところ申し訳ないが、先に言い当ててしまった。いや、でも、俺は悪くない。だってそうとしか思えないじゃん。俺は世界一理解が早い男の息子なのだから。

『さて、合否結果だ！君ほどの実力ならばもう自分でわかっているかもしれないが、見事合格！筆記はギリギリだが、実技が素晴らしい！』

「素晴らしいってさ！」

「筆記はギリギリだってさ！」

「合格なんですから目を瞑っていただけませんかね……？」

いいよいいよと俺の肩をぽんぽんする母さんは、まさに世界一理解のある女。筆記ギリギリだというのは情けないが、これが今の実力なのだから受け止めるしかない。実は頭がよくなるモード『ｂｒａｉｎ』があるのだが、あれを使った後は急激な眠気に襲われるため試験

で使うのは怖かったのだ。それで実技がボロボロになったら意味ないしね。
　そして実技が素晴らしい結果になったので、俺の作戦は大当たりだったわけだ。素晴らしいな俺。
『敵ポイント４６！途中からペースは落ちたものの上位に食い込むポイント数！これも素晴らしいがこれだけじゃない！我々雄英はもう一つの基礎能力も評価していたのさ！』
「なんだろ。世界一度とか？」
「じゃあ一成物凄いポイント貰ってるんじゃない？世界一なんだし」
　そうかもしれない。なにせ世界一だし。
『それは救助活動（レスキュー）ポイント！人救けした受験生に送られる、審査制のポイントさ！そのポイントが３０ポイント！試験という他との競争の場で人救けをするその精神も素晴らしいが、何より我々が評価したのはその言動！』
　言動？俺何かいいこと言ってたっけ。身に覚えがない。
『君は人救けをする度に激励の言葉を投げかけていた！これは不安になっている人を安心させる人救けの基礎スキル！それが君には備わっている！』
「……」
　母さんからの柔らかい視線がすごい。「いい子に育ってくれてよかった」と目で語っている。ま、まぁ俺は世界一優しい男だから当然のこと。無意識にでもヒーローらしいことをやってのけちまうのさ。
『合計７６ポイント！文句なしの合格だ！こいよ、須一少年！雄英（ここ）が君のヒーローアカデミアだ！』
「よかったね。一成」
「……い、いや？合格するのは当然だし、大事なのはここからだから。世界一な俺にとって雄英なんてただの通過点だ。うん」
　そう、大事なのはここからだ。雄英に入ってどう過ごすか。有意義な学生ライフ？違う。俺はヒーローになりに雄英へ入るんだ。学生ライフも大事だが、一番はヒーロー。そこを曲げては世界一じゃない。

「つまり、俺が入試一位で通過するのも当然で、一番の成績で卒業するのも当然だ！」
『あ、ちなみに君は実技二位だ。惜しかったな！』
「あら」
「ええ？」
後日聞いた話によると、俺はそれから３０分ほど固まっていたらしい。一番じゃなかったことがどれだけショックだったんだ、俺。
いやしかしそこまで悔しがれるのは伸びる証拠。何も恥じることではない。
俺は世界一切り替えが早い男。

第３話　世界一登校が早い男

春。

「俺は世界一登校が早い男！」

「いってらっしゃーい」

俺は世界一教室に早くつくため、早々に家を出た。早く起きすぎて母さんが作るはずの朝食を家族全員分作ってしまったほどである。世界一器用でもある俺は料理を作ることなど造作もないのだ。

外で堂々と個性を使うと頭の固い人たちがうるさいので、モード『ｓｐｅｅｄ』を使わずに全力疾走する。基本的に個性『スイッチ』はモード『ｐｏｗｅｒ』なら筋力に、モード『ｓｐｅｅｄ』なら脚にとそれぞれ強化される部分に負担がかかるので、その負担を軽減するために自らを鍛えておく必要がある。つまり、個性を使わずとも俺は素晴らしい能力を持っているということだ。

ちなみに、モード『ｂｒａｉｎ』を使うと急激な眠気に襲われるのは、別に頭が悪いからとかそういうことではない。決して。

嫌なことを考えてしまったので、高校生活のことについて思考をスイッチする。

雄英高校は狭き門。選ばれた者だけが入学を許される。一般入試でヒーロー科に入れる人数はわずか３８名。推薦入試の４人を加えると１クラス２１名が２クラスで、合計４２人しか入れない。その中の１人が俺で、更に実技成績２位。ということは俺がめちゃくちゃすごいということである。

「雄英到着！」

そうこうしているうちに雄英に着いた。見る度に思うが、「お金かけてますよ」とアピールせんばかりの外観である。何か学校というより会社みたいな見た目だ。将来こういうヒーロー事務所を持てたらどれだけ誇らしいことか。まぁ俺のように世界一な男はこれよりすごいヒーロー事務所を持てるに決まっているのだが。

門をくぐり、１―Ａの教室を目指す。登校が世界一早かったからかまったく物音も声も聞こえない。最高峰の学校に一番乗りとは、これ

は俺が世界で一番という証明だ。
「でか」
1―Aの教室に着くと、デカい扉が待っていた。大体5メートルほどの高さがある。恐らくあらゆる個性の生徒に対応するためだろう。バリアフリー？ってやつだ。
教室に入ると、やはり誰もいない。新入生の中で俺が一番。というか雄英の中で一番。いやぁ、世界一はやはり世界一だ。
席順がわからないので俺はとりあえず教卓の前である一番前に座ることにした。俺は一番を愛する男。
しかし朝早く着きすぎるとやることがない。誰かがいるとコミュニケーションをとるのだが、一人だとどうも。教室の掃除もやる必要がないくらい綺麗だし、ほんとに何をしよう。俺は世界一計画性がない男。黒板にチョークでもあれば俺の自己紹介を書けたのに、チョークすらない。
「お」
「あ？」
そうして暇を持て余していると、二番目の、そう二番目の新入生が教室へ入ってきた。俺の次に入ってきた人物は爆発ツンツン頭の目つきが悪い男。ネクタイをしていないのは我が道を行くタイプだからだろうか。高校生ながらしっかりした自分を持っているのは尊敬できる。友だちになろう。
「おはよう二番！俺の次に登校するとはすごいやつだ！」
「あぁ!?誰が二番だテメェ！」
「ん？二番に反応するってことは君も一番が好きなのか！気が合いそうだ！俺は須一一成、よろしく！」
「よろしくしねぇわ！つか、お前『も』ってことはテメェ一番が好きなのか？」
お、よろしくしないって言ってるのに一番が好きなのか？って話す気満々じゃん。かわいいやつめ、不良っぽく見えるが実はうまく人と接することができないシャイボーイと見た。口が悪いのもそのせいだろう。ここは優しく接するべきだ。

「おう。俺は世界一が好きな世界一切り替えが早い男！惜しくも実技は二位だったが、いずれ頂点まで上り詰める！君も共に頑張ろう！」
「ハッ」
　握手しようと手を差し出すと鼻で笑われた。鼻くそでも詰まってたのかな？
「俺が実技一位だ。テメエごときに追い抜かれるかよ、ザコ」
　言って、俺を見下したヤツは後ろの方に向かい、左から二列目、後ろから三番目の席に座った。
「ハッ」
「あ？」
　その姿を見て鼻で笑ってやると、ヤツが眉を吊り上げ俺を睨んでくる。まったく、実技一位の割には程度が知れている。まさか一番前ではなく後ろから三番目に座るとは。
「同じ一番を好きな者として情けない。まさか一番前じゃなくそこに座るとは。この時点で君は俺に負けを認めたことになる」
「席順関係ねぇだろ。んなことにこだわってるからザコなんだよ」
「とことん一番にこだわるのが世界一たる所以。あと言い方は悪いが、人を見下した発言ばかりすると余裕がないように見えてダサいぞ。ん？」
「は？」
「あ？」
　お互い立ち上がり、睨みあう。そしてヤツは自分の荷物を持つとそのまま前に移動し、俺の隣の席に座った。
「上等じゃねぇか！テメエがどんだけザコかわからせたるわ！」
「そっちこそ俺がどんだけ世界一かわからせたるわ！」
「真似すんじゃねぇ！」
「あと名前何？」
「急に落ち着くなや！爆豪勝己だ！テメエの上に立つ男の名前しっかりそのノミよりちいせぇ頭にぶち込んどけ！」
　爆豪勝己。いい名前だ。そしてまさか教えてくれるとは思わなかった。爆豪なりに少しは俺を認めてくれたということだろうか。

どこに認める要素があったかわからないが、コミュニケーションの成功をまず喜ぼう。友だち第一号だ。話してみると口が悪いわりにそこまで悪い奴じゃないし、仲良くやれそうだ。煽っちゃったけど。
「ところで勝己の個性は何なんだ？俺の個性は『スイッチ』！あらゆるモードにスイッチし、そのモードに合わせた力を発揮する世界一の個性！」
「俺の『爆破』が世界一だ！勘違いしてんじゃねぇ濃ゆ顔！」
「濃ゆ顔!?」
「彫り深ぇんだよテメェ！日本人らしくしろや！」
　俺の彫りの深いハンサムフェイスを濃ゆ顔と言ってバカにしてくるとは。いや、これは遠回しに「ハンサムですね」と褒めてくれているのか？そうに違いない。勝己は人を素直に褒めることができないシャイなヤツなんだ。
「勝己もカッコいい顔してるよな。俺の次に」
「何勘違いしていきなり褒めてんだ！つか俺のがカッコいいわ！」
「何でも張り合ってくるな、勝己」
「テメェがいちいち自分が一番だってウゼェくらい言ってくっからだろうが！」
　いちいちとウゼェを重ねて言ってくるとは、そこまで言わなくても。ただ、俺が一番であることは純然たる事実。確かに勝己が実技一位で俺が二位であるということは変わりないが、これから俺が一位になるのだから俺が一番であることに間違いはない。
　しかし、結構ちゃんと？返事してくれる。やはりヒーローを志しているから根っこは優しい部分があるのだろう。ストイックで顔がよく、普段口は悪いが根っこが優しい。なんだそれ、モテそう。
　そんな俺の次にモテそうな勝己は、机に足をかけてポケットに手を突っ込んでいる。どう見ても不良だ。その不良が俺を睨みつけて何か言いたそうにしている。きっと「お前、世界一だな」と言ってくれるに違いない。
「テメェ、７６ポイントらしいな」
　違った。まさか実技のポイントでマウントを取ってくるのだろう

か。まぁ今の俺の位置を確認するためにはいいかもしれない。
「おう。敵ポイント４６で、救助活動ポイント３０の合計７６ポイント」
「俺は敵ポイント７７で一位だ」
「？」
「救助活動ポイントは０」
　勝己は俺を睨んだまま低い声で言った。
「テメェには負けねぇぞ」
「ん？でも敵ポイントと救助活動ポイントをどっちも多く取って、しかも実技二位って俺の方がヒーローっぽくない？つまり俺の勝ちじゃない？」
「チマチマ助けるより敵を全部ぶっ潰せば済むんだよ！テメェは弱ぇからできねぇだろうがな！」
　確かに最後の方は普通にばててたし、敵ポイントを７７もとるのは正直キツイ。そういう意味では勝己はものすごくタフなのだろう。俺よりも。うん、そこはまず認めなければならない。どうせ俺が追い抜くから勝己は二番目に成り下がるのだが。
「まぁ実際戦ってみれば俺が勝つし。体育祭が楽しみだなぁ。俺が一番になる体育祭」
「俺が一番になるわ！テメェはせいぜい二番にしかなれねぇよ！」
　やはり認めてくれているのか。二番にはなれると思ってくれているってことだから。俺は二番で満足する男ではないので、必ず勝己に勝って一番になるが。
「それにしても他の人遅くね？今日登校する日であってるよな？」
「テメェはまだしも俺が間違えるかよ」
　俺は世界一うっかりなので間違える可能性があることは否定できない。こいつこの短時間で俺のことを理解するとは、中々やるやつなのでは？
「お」
　まだかなまだかなと待っていると教室のドアが開いた。入ってきたのは入試の時に見たメガネの子。今は世界一速いが、いずれ世界二

になる男。
「おはよう！そしてよろしく！俺は須一一成！世界一切り替えが早い男！」
「おはよう！俺は飯田天哉だ。よろしく！切り替えが早いのは素晴らしいな！」
「テメェいつも切り替えが早いって言ってんのか？」
「事実だからな！」
　天哉の印象は真面目。もじゃ毛を注意していたのはその真面目さからくるものだろう。もじゃ毛は天哉のことを怖いやつだと思っていそうだが、こいつは間違いなくいいやつだ。俺の次に。
「君もおはよう！俺は飯田天哉！よろしく！」
「聞いてたわ！いちいち名前言うんじゃねぇよ端役が！」
「それはすまない！ところで君の名前を教えて欲しいのだが」
「誰が教えるか！」
　爆豪が初対面の人間に対して必ずといっていいほど発動する威嚇をしているので、横から勝己の名前を天哉に教える。新入生同士仲良くしないと。
「こいつは爆豪勝己。よろしく」
「そうか。よろしく爆豪くん！」
「勝手に教えんな！」
　天哉は俺の後ろに座り、勝己は変わらず俺を睨みつけてくる。そんなに睨んで目が疲れないのだろうか。これもタフネスの賜物か。
「君たち仲がいいな。同じ中学なのか？」
「さっき会ったばっか。でも物凄く気が合ってさ」
「合ってねぇわ！脳内にお花詰まってんのか！」
「お花て」
　言動に似合わず可愛らしいことを言ったので思わず笑ってしまった。お花か。詰めてみてもいいかもしれない。俺は世界一メルヘンな男。
「ちなみに勝己が実技一位で俺が二位。最強の二人です。よろしく」
「何っ、ということは越えるべき壁ということか！君たちから学ぶこ

とは多そうだな」
「テメェ実はマウントとるの好きだろ？」
何のことだろうか。人聞きの悪い。ただ、言い返せることがないので教室のドアを眺めることにした。勝己が「おい、聞いてんのか」と言ってくるが無視だ。無視。
次はどんな個性的な人がくるのだろうか。まぁ俺には負けるだろうが。

第４話　個性把握テスト

「俺は須一一成！世界一切り替えが早い男！」
　来る人来る人に同じ自己紹介を繰り返す。こうして自己紹介を繰り返すことでクラス全員に俺の名が知れ渡り、友だちがいっぱいできるという寸法だ。やはり俺は天才らしい。
「テメェよくそんなに自己紹介ばっかやるな。体力を無駄に使ってる自覚あるか？」
　そんな俺の自己紹介を隣の席でつまらなさそうに眺めていた勝己がバカにしたように聞いてくる。体力を無駄に使っている？そんなはずはない。俺は世界一体力を効率的に使う男。
「せっかくこれから三年間一緒になるんだから、仲良くしたいだろ」
「けっ、仲良しこよしで強ぇヒーローになれるんかよ」
「一匹狼気取ってるの？ダサいぜ？」
「あ？」
「おお？」
　勝己が睨んできたのでこちらも睨み返す。どうしてこいつはこうも喧嘩を売ってくるのだろうか。今喧嘩を売ったのは俺のようにも見えるが、気のせいである。俺は温厚なんだ。喧嘩を売るなんてそんなそんな。
「あれかな？群れるのは弱いやつがすることだって言っちゃうタイプ？集団でいた方が効率がいいのに？」
「ザコと一緒にいるよか何でもできる俺一人の方が何倍も効率いいに決まってんだろ」
「例えば俺と勝己が一緒にいるとします」
「ついてくんなカス」
「テメェやるってのか!?」
「上等だコラ！世界一世界一うるせぇテメェにどっちが一番かハッキリさせてやらぁ！」
　お互い立ち上がって額をぶつけ合い至近距離で睨みあう。ここでやりあうのはみんなに悪いから外に行こうと教室の入り口を見た。

「あ」
「あ？」
　見知った顔を発見し呆けた声を出す俺に、「どうした行かねぇのか」の意を込めて「あ？」と言う勝己。しかし待ってほしい。あのもじゃ毛とお茶子ちゃんは入試のときからの友だちなんだ。声をかけるくらい許してくれ。
「んだ、テメェデクと知り合いなのか」
「デク？あのもじゃ毛のこと？」
　聞くと、勝己は機嫌悪そうに頷いた。なるほど、どうやらあまり仲良くはないらしい。いじめっ子といじめられっ子ってタイプだもんね。偏見だけど。
「ちなみにあの二人の後ろに寝転がってる芋虫はご存知？」
「知るか。あんな不審者すぐにここの教師がつまみだすだろ」
「担任の相澤消太だ。よろしくね」
「「教師かよ」」
　思わず声を揃えて言うと、担任？の相澤先生から睨まれてしまった。今日の俺睨まれすぎじゃない？そんなに悪いことしてないのに。
「早速だが、コレ着てグラウンドに出ろ」
「体操着」
「体力テストかなんかだろ」
　相澤先生は自分が入っていた寝袋から体操着を取り出し、俺たちに見せてきた。まさかグラウンドで入学式を行うのだろうかと思ったが、勝己の言っていることが一番しっくりくる。ヒーロー科だから個性を使った体力テストみたいな？何それいきなり一番を決めるなんて。
「もしそうなら勝己に俺の一番を見せつけることになっちゃうのかぁ」
「黙ってろ。さっさと着替えていくぞ」
　あ、一緒に行ってくれるのね。
　勝己が睨んでくるので、急いで着替えて一番乗りにグラウンドへ出た。俺たちの後に続いてぞろぞろとみんなが出てきて、全員が揃った

のを確認して相澤先生が話を切り出す。
「さて、今から個性把握テストを行う」
「個性把握」
「テスト」
　個性把握、と呟いた勝己に合わせてテストと言うと、またも睨まれてしまった。なんだよ、仲良し感出ていいじゃん。いらない？そう。
「中学の頃やっただろ？個性禁止の体力テスト。アレの個性許可版だと思ってくれればいい。爆豪、中学の時ソフトボール投げ何メートルだった」
「６７メートル」
「俺は７０」
「殺すぞ」
　ボソッと耳打ちすると、殺害予告されてしまった。俺の方がすごいよとアピールしただけなのに。まったく、これだから負けず嫌いは困る。俺もだけど。
「じゃあ個性使ってやってみろ。円からでなけりゃ何してもいい。思いっきりな」
　勝己はソフトボール投げ初期位置のサークル内に入ると、俺を見た。見とけよということか。中々子どもっぽいところあるじゃない？
　そして。
「死ねえ!!」
「死ね？」
　爆音とともにボールが天高く放たれた。投げるときの声はともかく、流石実技一位なだけあってものすごく伸びている。投げられたボールはやがて地面に落ちると、先生が持っている機械にその記録が表示された。
「まず自分の最大限を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段」
　記録は７０５．２メートル。
「すげー面白そう！」

「流石ヒーロー科！個性思いっきり使えるんだ！」
「勝己！いいか、７０５．２―６７で６３８．２！それが勝己の個性の記録だからな！」
「頑張れよ」
「勝った気でいるんじゃねぇ！」
　今まで個性を禁止されていた反動からか、現実離れした記録に全員が沸き立つ。勝己もどこか誇らしげで、俺を見下してくる始末だ。いや、勝己が見下してくるのはいつものことだが。
　そんな俺たちに釘を刺すように、先生がボソッと呟いた。
「……面白そう、か」
「俺は言ってませんけど？」
「ヒーローになるための三年間、そんな腹づもりで過ごす気でいるのか？」
　どうやら先生の何かに触れてしまったらしい。初対面の人は地雷がどこにあるかわからないから困る。勝己は大体地雷だからむしろ困らない。
「よし、じゃあこうしよう。トータル成績最下位の者は見込みなしとし、除籍処分とする」
「じゃあな」
「最下位になるか！この俺が！」
「生徒の如何は教師の自由。ようこそこれが雄英高校ヒーロー科だ」
　雄英は自由な校風だと聞いたが、先生も自由なのか。まったく、テンションが上がってきた。
「つっても除籍ってなぁ。恨みで敵になる人出てきそうだ」
「だから見込みなしなんだろ濃ゆ顔」
　納得してしまった。勝己は頭の回転が速いらしい。
　まぁ、いくらなんでもヒーロー科をやめさせられるだけで普通科かどこかに入れられるんだろう。高校から出てけってなると世間が黙ってないだろうし。自分の子どもが先生に高校をやめさせられましたって、親なら納得できないものね。
「第一種目は５０メートル走か」

天哉が５０メートルを走り抜ける姿を見て、首を傾げる。入試で見た時はもうちょっと速いように見えたが、気のせいだろうか。それとも今のはトップスピードじゃなくてどんどん加速していくとか？
「勝己、トータルで負けた方が飯奢りってのはどう？」
「ごちそうさま」
「財布の中身確かめとけよ。俺は優しいから食う量はほどほどにしといてやるよ」
「あ？」
「ん？」
「出席番号１３番、１４番、入れ」
まさに喧嘩を始めようとしたその時、先生に呼ばれてしまった。命拾いしたな、勝己。
中指を立ててくる勝己に中指を立ててスタートラインに立つ。隣に立っているやつは勝己がしょうゆ顔だと言っていた範太だったか。確かに。勝己は完全に蔑称のつもりで言ってるから範太がしょうゆ顔ってことに納得したことは言わないでおこう。
「うし、スイッチ。モード『ｓｐｅｅｄ』！」
「スリムになった！」
「どういう個性だ？あれ」
ギャラリーの声が心地いい。俺のことをカッコいいと騒いでいるみたいだ。当然のことだが、嬉しいものは嬉しい。あれ、カッコいいって言ってる人ひとりもいなくない？
「スタート！」
不意打ち気味にスタートの合図が出されたが、俺は世界一反射神経がいい男。問題なくスタートを切る。
モード『ｓｐｅｅｄ』はその名に相応しくとても速い。それはトップスピードに乗るまでの早さも。つまり、
「この競技において俺は天哉よりも速いということ！」
「３秒０５」
「嘘ぉ!?」
「あいつ多分面白いやつだな」

「一番一番って言ってるのも嫌味に聞こえないよね」
「だっせ」
負けた。天哉の個性は加速していくものじゃなかったのか？いや、加速していくものなはず。ということはトップスピードに乗っていない天哉に負けたのか。
「でも０．０１だ！はい俺すごい！世界一！」
よく考えてみれば天哉は速くなる個性がメインだが、俺は別のこともできる。ということは天哉もすごいが俺の方がすごい。天才。
「４秒１３」
「俺のかちー」
「てっめぇ……」
勝己の番が終わり、その記録は４秒１３。まずは俺の勝利だ。いやぁ天才は辛いね。
全員が走り終え、第二種目握力。
「スイッチ。モード『ｐｏｗｅｒ』！」
「今度はゴリッゴリになった！」
「ちょっとオールマイトみたい」
「ふん！」
モード『ｐｏｗｅｒ』になり思い切り測定器を握りしめる。５４０キロというとんでもない記録をだしたやつがいたが、俺がそれに負けるはずがない。なにせこのモード『ｐｏｗｅｒ』は世界一の力を誇る。
「４８０キロ……」
また負けた。ちくしょう、なんだよ５４０キロて。ゴリラかよ。腕めっちゃあるし。カッコいいし。まぁ勝己には勝てたけど。あれあれ、大丈夫かな？
第三種目、立ち幅跳び。
「スイッチ。モード『ｊｕｍｐ』！」
「脚長っ！」
「びっくり人間すぎる」
「とう！」
多くの声援を受け、思い切り跳んだ。記録は２０メートルでまずま

ずといったところか。前ではなく上ならもっと跳べるのだが、競技上仕方ない。
第四種目、反復横跳びはモード『ｓｐｅｅｄ』で挑んだが、あまり記録が伸びなかった。速すぎると反復するときに足の負担がすごいから調整が難しいんです。
第五種目、ボール投げ。
「うーん、ここまでの記録を見ると俺が勝ってるなぁ」
「調子乗んな！俺が勝つわ！」
「ふふん。まぁボール投げでも勝つんで、見ててくださいや」
サークル内に立ち、モード『ｐｏｗｅｒ』を使ってボールを握りしめる。あとは単純、最も綺麗で効率のいいフォームでボールを投げるだけ。目標７１０メートル！
「パゥワァァァァ!!」
美しいフォームからの美しい投擲。これはみんなも見惚れるに違いない。俺が知る限りベストな投擲ができた。これは勝ったな。
「７０１メートル」
「７０１」
「吠えやがって負け犬が」
「はいはい。今までの成績で負けてる子犬は黙りましょうねー」
「見とけ」
勝己が青筋を立てて行ってしまった。その怒りを保ったままボールを投げると、俺よりすごい記録。失敗してくれないかなと思ったが勝己がそんな失敗をするはずがないか。なんでもこなせそうだし。かわいくない。
「ハッ」
「ぐぬぬ……あ、もじゃ毛だ。ヒーローらしい記録出てないなー大丈夫かなー」
「逃げんなコラ。つかったりめぇだろ。アイツ無個性のクズだぞ」
「無個性？」
もじゃ毛を見ると、一投目４６メートル。確かに無個性の記録だ。でも入試の時は確か。

「あいつ、入試んとき０ポイント仮想敵ぶっ飛ばしてたぞ？」
「は？」
勝己が間抜けな声を出すと同時。
もじゃ毛が放った一投は天高くに軌跡を描いた。
「７０５．３メートル」
「……は？」
勝己がまたも間抜けな声を出す。そういえば幼馴染だなんだと言っていたか。この反応を見るにもじゃ毛の個性は知らなかったようだ。そんなことある？幼馴染なのに？どんだけ仲悪いの。
「……どういうことだデク!!ワケを言えコラ!!」
「あ、おい」
地雷だらけの勝己は今起きた出来事も気に入らなかったらしい。鬼の形相で個性を使ってもじゃ毛の下へ向かった。が、途中で先生に捕縛されてしまいなんとも間抜けな姿になっている。
「ったく、幼馴染なら仲良くすりゃいいのに」
まぁ他人にはわからない領域に二人の複雑な関係があるのだろうが。なんとも物騒な関係である。

第5話　初のヒーロー基礎学

「はぁー白黒ハッキリした後は気分がいいなぁ!?」
「クッソが……!!」
　あの後残りの三種目をこなし、いよいよ誰が除籍されるのかとなった時。先生から「除籍は嘘でーす」という合理的虚偽が告げられ、安心して順位を見ることができるというわけだ。自己紹介したのにすぐ除籍なんて悲しいからな。
　そして順位を見てみると、俺は三位で勝己は四位。なんで俺が一番じゃないの？と首が痛くなるくらい首を傾げたが、勝己には勝っている。いやぁ、持久走のときにスイッチのし過ぎで体力がなくなってずたずただったから正直不安だったが、勝ててよかった。
「ねぇ勝己くん？」
「つるせぇ！成績で言えば実技で俺が一勝、個性把握テストでテメェが一勝！白黒ハッキリはしてねぇぞ！」
「まぁそういうことにしておいてやろう。ところで何食べたい？財布大丈夫？」
「余裕だカス！なんでも食えや！」
　体操着から着替えながら煽っていると、勝己からとても太っ腹なお言葉。そうか、なんでもか。何にしよう。寿司にしようかな？俺好きなんだよな寿司。色んな種類食えて尚且つうまい。回らない寿司は確かにうまいが、俺は回らない寿司の方が好きだったりする。アレ楽しいもの。
「回転寿司行こうぜ回転寿司。安いし財布にも優しいだろ」
「んな心配しなくても金なら余るほどあるわ！舐めんな！」
「みんな！余るほど金のある勝己が回転寿司奢ってくれるらしいぜ！行こう！」
「つざけんな！テメェだけだボケ！」
　お前だけ、あなただけ、というセリフはみんな一度なら言われてみたいセリフだと思っていたが、ここまで色気がないものだとは。おい、女に生まれ変わってもう一度そのセリフを言え。

「お、マジ？見た目コエーのに太っ腹なんだな」
「俺もいいか？金は自分で払うからよ」
　俺の声に釣られてか、見るからにチャラそうな電気と赤くカチカチの髪をした鋭児郎がやってきた。電気は明るくチャラい、鋭児郎は硬派というイメージだ。一つ言えることは二人ともいいやつだということである。
「おうおう。勝己は人に奢りたくて仕方なくなるタイプなんだ。存分に食べてくれ」
「んなタイプあるか！テメェらは自分で払えよ！」
「言われなくても払うって」
「つかついていくのはいいのか」
　なぜかイライラしている勝己を先頭に、俺たちは教室を出た。今日名前を知ったみんなに手を振るのも忘れない。
「須一って初対面でもグイグイいくよな。全員下の名前で呼んでるし」
「ん？フレンドリーな方がいいだろ？同じクラスなんだし」
「つっても爆豪とは今日会ったばっかなんだろ？普通あそこまで調子乗った発言できねぇよ」
「話がわかるな、クソ髪」
「切島な。切島鋭児郎」
　勝己は俺のことが嫌いなのだろうか。ありえる。寿司を食わせて油断したところを爆破するつもりなのかもしれない。敵みたいな顔してるし。冗談だけど。ヒーロー志望に敵みたいは最大の侮辱だろう。でも敵っぽいヒーローランキングの上位に食い込みそうだよね。
「そんなにグイグイいけて顔もいいなら彼女の一人や二人いたんじゃねぇの？」
「いや、いないぞ？」
　何かを期待するような目で聞いてくる電気に否定で返すときょとんとされてしまった。そんなはずはないと顔に書いている。俺が彼女できたことないのがそんなに不思議なのだろうか。
「顔が濃すぎてキモいって言われてたんだろ」

「残念バレンタインデーめちゃくちゃもらってましたー。何せ俺、カッコいいから？」
「うぜぇ」
「そんなに貰ってたのに彼女いなかったのか」
　うーん、バレンタインデーにチョコをいっぱい貰っていたら彼女ができるというのは、少し決めつけが過ぎるというか。
「ほら、俺雄英に入りたかったし。個性伸ばすために体鍛えたり筆記通るために勉強したりでそんな暇なかったから」
「意外にストイック」
「男らしいな！いいと思うぜ、そういうの！」
　いやぁ照れる。実はカップルを見てめちゃくちゃ羨ましがってたっていうのはばらさないでおこう。だって楽しそうなんだぜ？男女で幸せそうにいちゃいちゃして、見せつけるように体を寄せ合って。俺も高校に入ったら……とは思っていたが、雄英でそんな暇があるのだろうか。なさそう。
「テメェの個性、詳しく教えろ」
　照れていると、前を歩いていた勝己が前を向いたままそう言った。
「個性伸ばすために」の部分だけ聞いて興味を持ったのだろうか。恐らく個性を知って対策し、俺を負かしてやろうという魂胆だろう。勝ちに貪欲な勝己らしい。
「そういや気になるな。ゴリゴリになったりスリムになったり」
「結構万能っぽかったけど」
　やはり周りから見ると俺の体型が変わるのは気になるらしい。俺もいきなり体がゴリゴリになったりスリムになったりする人がいたらめちゃくちゃ気になるから、それも当然と言えるだろう。
「俺の個性はあらゆるモードにスイッチして、そのモードに合わせた力を発揮する。例えばモード『ｐｏｗｅｒ』なら力が強く、モード『ｓｐｅｅｄ』なら速くなる。でも自分の本来の力を超えた力を使うから、どうしても体に負担がかかるんだ」
「それで持久走のときはヘボかったのか」
　ヘボって言うな。

「んで、元の体を鍛えておくと個性の限界も伸びて、更に負担も減る。ちなみにモードはまだ見せてないのがいくつかあるが、それはその時のお楽しみ！」
「選択肢が多そうでいいな」
「モードの組み合わせとかはできねえの？『ｐｏｗｅｒ』と『ｓｐｅｅｄ』とか」
「それをすると体がイカれる。特訓中だ」
「ザコ」
「なに？」
「やんのか？」
　勝己の挑発から始まった口喧嘩は回転寿司にたどり着くまで続いた。初めは止めに入っていた二人も徐々に呆れ初め、俺たちをスマホで撮る始末。舐めとんのか。
　とはいえ、いい高校生活のスタートを切れた。雄英は愉快なやつが多そうだ。

　翌日、ヒーロー基礎学。
「わーたーしーがー!!普通にドアから来た!!」
　オールマイトが教師をやるとは聞いていたが、実際にその授業を受けるとなると何か変な気分になる。なにせＮｏ．１ヒーローなのだ。そんな人が教師なんて違和感がないわけがない。あと普通にって言ってるけどドアのふちに手をかけて身を乗り出す入り方は全然普通じゃない。普通を学びなおせ。
「ヒーロー基礎学はヒーローの素地を作るために様々な訓練を行う課目だ!!今日は早速戦闘訓練！」
「戦闘……！」
「勝己めちゃくちゃ嬉しそうだな」
　顔がヒーローのそれではない。今すぐ何かを壊したくてたまらないといった風な顔をしている。子どもに人気でないぞ、それ。一部はカッコいいと思うかもしれないけど。

「そしてこれが君たち待望の、入学前に送ってもらった個性届と要望に沿ってあつらえたコスチュームだ!!」
　オールマイトの紹介とともに壁が動き、中からコスチュームを入れたトランク？が現れた。振ってある番号は出席番号だろう。俺は１３番だ。１３は３を消すと１になるから好きだ。
「着替えたら順次グランドβに集まること！いいね？」
　はい、と返事をして各々自分のコスチュームを取りに行く。俺のコスチュームは至ってシンプルで、体がどんなに変形してもいいように伸縮性のある素材を使い、モード『ｓｐｅｅｄ』のときに攻撃をくらっても耐えられるように衝撃に強い作りをしたシンプルなものだ。上は前を開けた青を基調に黒い線が入ったジャケット、肌着に赤い「一」の文字が入った黒のシャツ。下は灰色のカーゴパンツに似た見た目のものを。あとはブーツとグローブをつけて完成である。
「かっちょええ」
「呆けんな。行くぞ」
　せっかくヒーローらしくなったのに、勝己は何の感動もなく行ってしまった。少しは感動させてくれてもいいのに。いいもん。誰が何と言おうと俺はカッコいいし。
　グラウンドβに向かうと、大体全員揃っていた。それぞれ個性的なコスチュームで見ていて楽しい。あと百ちゃん過激すぎない？個性上そうなるのはわかるんだけど。
「さて、始めようか有精卵ども！今回は屋内での対人戦闘訓練だ！」
「屋内」
「そう！目にする機会は屋外の方が圧倒的に多いが、実は凶悪敵の出現率は屋内の方が圧倒的に多い！これから君たちには敵組とヒーロー組に分かれて２対２、あるいは２対３の屋内戦を行ってもらう！」
　クラス全員で２１人だから、そうなるのか。３人のチーム有利じゃない？
　この後オールマイトから伝えられた状況設定はこうだ。
　敵がアジトに核兵器を隠しており、ヒーローはそれを処理しようと

している。ヒーローは15分の制限時間内に敵を捕まえるか、核兵器を回収すること。敵は制限時間まで核兵器を守るかヒーローを捕まえることが勝利条件となる。捕まえたかどうかの判断材料は確保テープ。確保テープを巻きつけることで捕らえた証明となる。
「チーム及び対戦相手はくじで決めるよ！」
「お、勝己とは別がいいな」
「殺してやらぁ」
　物騒なことを言いつつくじを引いていく。殺すて。訓練ですよこれ。
「ありゃ」
　引いたくじには「すけっと！」と書かれていた。なにこれ。
「須一少年！それは三人目の証！君が対戦相手を見て好きなチームに入ればいい！」
「パワーバランス的なアレはどうするんですか？」
「もちろん私が判断するさ！とはいっても君はバランスが崩れるようなことはしないだろう？」
　しない、とは思う。恐らく。
「さぁ最初の対戦相手は……Ａチームがヒーロー！Ｄチームが敵だ！」
　Ａチームは出久とお茶子ちゃん。Ｄチームは勝己と天哉だったか。ふむ。勝己と戦いたいからここはＡチームに、と行きたいところだけど。
　勝己の様子を見ると、どうも邪魔されたくない様子。出久に何かしらの用があるらしい。となるとここで入れば後でブチ切れられること間違いなしだ。ほんと面倒くさいやつである。
「須一少年、どうする？」
「見送りで」
「オッケー！じゃあ始めようか！敵チームは先に入ってセッティングを！Ｄチームは敵の思考をよく学ぶんだぞ！」
　戦闘するチーム以外はモニターで観戦。なんか怖くて見れない気がする。勝己なんかどす黒いオーラ出てたし。アレろくなことしな

いぞ。

俺は少しの不安を抱えながら、地下モニタールームへ移動した。

第６話　第二戦、ＶＳ轟焦凍

戦闘訓練開始直後の奇襲。それに対応する出久。見ていてアツいが、訓練というよりただの喧嘩に見えた。出久は個性を一切使わないし、対応し続けるのも難しいだろう。見たところ勝己は反射神経がエグイ。見てから反応できる神経と見てから対処できる個性、それに勝己自身の戦闘センスが加わり、とても手を付けられる状態ではなくなっていた。

俺ならどうするか。モード『ｓｐｅｅｄ』は速くなっても倒せるだけの力がでず、モード『ｐｏｗｅｒ』では勝己を捉えることができない。かといってモード『ｓｐｅｅｄ』でつめてモード『ｐｏｗｅｒ』にスイッチしようとしても、その隙をつかれてやられる未来が見える。

つまり、今のままでは勝己に勝つことは難しい。個性把握テストでは勝てたが戦闘では別と言うことか。敵ポイント７７は伊達ではない。

そして。

「うっわ、殺す気かよアイツ」

大規模な爆発が起き、ビルの一部を粉砕した。アレが当たれば無事では済まないだろう。モード『ｈａｒｄ』でも耐えきれるかどうかわからない。一番安全なのはモード『ｓｐｅｅｄ』からモード『ｊｕｍｐ』で逃げることか。俺さっきから勝己と戦ったときのことばっか考えてない？

モニターの中の勝己は、どこか余裕がなさそうに見える。焦っている？何に？ダメだ。考えるのは得意じゃないからまったく読めない。とりあえずわかったことは勝己と出久は両方強いってことだ。

「お」

考えている間に訓練が終わった。ヒーローチームの勝ち。出久が核のある部屋まで天井をぶち抜き、それを利用してお茶子ちゃんが核を確保という流れだ。別にタイマンで勝つ必要はないから正しいと言えば正しいのだが、ふむ。

出久は勝己の最後の一撃を左腕で防いでみせ、右腕で天井をぶち抜

いた。それを勝己に向けていたらどうなっていただろうか。よく考えなくてもわかる。つまり、勝己の負けだ。これ今日勝己に話しかけない方がいいかもしんない。

帰ってきた勝己は抜け殻のようになっていた。あの勝己が自分が負けていたということに気づかないわけがない。それを認めたくなくてデカいショックを受けているのだろう。もしかしたら認めた上でのアレかもしれないが、出会ってまだ日が浅いのでそこまでわからない。ただ、勝己のケアは誰がするのかという話で。

「さぁ気を取り直して第二戦だ！組み合わせは、Bチームがヒーロー！Iチームが敵だ！須一少年！」

Bチームは推薦組の焦凍に、腕がいっぱいある目蔵。Iチームは尻尾がある猿夫に、透明人間の透ちゃん。

「Iチームがいいです！確か焦凍って推薦入学者だよな！」

「あぁ」

めちゃくちゃクールだ。「あぁ」って。もうちょっと若々しい反応できないの？

「敵チームか。これはヒーローチームが不利だからできればヒーローチームに入ってほしいのだが」

「別にいいですよ。何人いても関係ないですし」

「あ、潰しまーす。カチンときちゃいました」

個性把握テストの成績が俺より高くて推薦組だからって調子乗りやがって！俺が敢えて推薦を貰わなかったということを思い知らせてやる！

「……まぁいいか！よし、場所を移して第二戦開始だ！」

あ、勝己が壊しちゃったもんね。俺は気を付けよう。「いつも喧嘩してるあの二人ヤバくない？近づかないようにしよ」なんて思われたらいやだし。

俺たちは敵チームなので先に入り、核を好きな部屋に置いて待ち構えることになる。相手の二人は個性を見ると一気に上の階に行く方法はなさそうなので一番上の階に核を置いた。もし氷を伸ばしてきても丸わかりだし問題ない。

「さて、どうするか。先に言っておくが俺は考えることが苦手だ！」
「俺たちが向こうとやりあってる間に、透明人間の葉隠さんが確保っていうのが普通だろうね」
「よっし！じゃあ全部脱いじゃお！本気モード！」
「見えねぇけどそっち見るのが悪い気してくるな……」
　ぽいぽいと手袋とブーツを脱ぎ、こちらからは見えないが全裸になる透ちゃん。華の女子高生がそんな簡単に裸になっていいものか。間違ってぶつからないようにしないと、俺が変態扱いされてしまう。
「なら俺たちもブーツは脱いでおこう。確か目蔵は音を聞いて索敵ができたはずだから、ちょっとは攪乱になるだろ」
　言いつつ、ブーツを脱ぐ。昨日コミュニケーション取っておいてよかった。個性の情報があるだけでこうも違う。
「んで、個性的に奇襲は速度が一番ある俺がやるわ」
「うん、頼んだ」
「しっかりね！」
「あぁ後、タイミング難しいだろうけど訓練開始直後はジャンプするよう心掛けた方がいいかも。焦凍は氷使うはずだし、程度は分からないけど開幕氷結は警戒しておいて損はない」
「……ほんとに考えること苦手なの？」
「考えてるわけじゃないからな」
　ただ知っている事実からこうなるだろうなっていうのを予測してるだけだ。本当に考えることが得意なやつってのはゼロから考えることができる。つまり俺は考えるのが苦手。わかった？
　核を置いた部屋に猿夫を残し、俺は奇襲するために二階へ、透ちゃんは核を置いている階と同じ階にある部屋で待機。
　基本的には数の有利があるのに1対2になりに行くのは愚策だろう。数の有利でごり押せばいいのだから当然である。しかし、相手が相手だ。焦凍は推薦組だから、最大限警戒しておいて損はない。何を言いたいのかと言うと、俺はもしもの時の囮だ。
『それではスタート！』
「スイッチ。モード『ｅａｒ』」

モード『ｅａｒ』。このモードは超絶耳がよくなる。代わりに他の感覚が激烈に低下し、目でいえばほとんど見えない。
耳をすますと、一階から声が聞こえてくる。どうやら目蔵が索敵をし、位置を割り出したようだ。俺はスタートから動いていないので足音もまったくないはずだから場所はわからないのだろう。『四階』というワードだけ聞こえる。
「外出てろ、危ねぇから。向こうは防衛戦のつもりだろうが……」
くる。目蔵が焦凍の言う通りビルの外から出て行ったタイミングを見計らって、小型無線を使って連絡する。
「ジャンプ！」
合図とほぼ同時。
ビル全体が氷に包まれた。俺はジャンプに失敗して足が凍らされてしまった。嘘やん。
「スイッチ。モード『ｎｏｒｍａｌ』」
モード『ｎｏｒｍａｌ』。いつもの自分の姿だ。モード『ｅａｒ』のままではどうしようもできないので元に戻っておく。
「猿夫、透ちゃん。そっちは大丈夫か？」
『なんとか』
『こっちもおっけー！』
「よし。二人とも、下の階にきてくれ。今なら焦凍を数の暴力で抑え込める」
なんと、失敗したのは俺だけか。ダセェ。合図送るのに夢中で自分が失敗するとは、なんたる失態。
「お」
「あ」
そして足が凍らされたまま焦凍と対峙してしまった。どうしよう。足の皮はがせば抜けられるけど、痛いもんなぁ。
「悪ぃな。後で溶かしてやる」
わりぃな？
おい、なんだその見下した言い方。この俺を見下す？世界一のこの俺を？ふふ、そうか。なら思い知らせてやろう。そういえばオールマ

イトは敵の思考を学べと言っていた。そうだ、敵ならこういうときどうする？答えは簡単。味方の援護を待つより不意打ち上等の突貫。
階段を上がっていく焦凍を睨みながら、ボソッと呟いた。
「スイッチ。モード『ｐｏｗｅｒ』」
そして、力任せに氷をはがし、瞬時にスイッチ。モード『ｓｐｅｅｄ』。
「その首置いてけやヒーロー!!」
「なっ」
そしてスイッチ。モード『ｐｏｗｅｒ』。
「おおおおおおおおおおおおおお!!」
振り向きざまの氷結を無視して、俺は焦凍の頭を掴んだ。体が凍っていくが、構わずギリギリと締め上げる。
「ハハァ、どうだ？格下と舐めてたやつに苦しめられる気分はよぉ？ヒーロー」
体が凍り切る前に空いた手で拳を作り、焦凍の腹を殴る。思い切りやるととんでもないことになりかねないので少し加減して。
「ぐふっ」
「テメェが俺の右手凍らせてっからテメェの顔から離れねぇな。もう一発！」
「やら、せねぇ！」
もう一発ぶち込む前に、体を凍らされた。これが凍るという感覚。感覚がなくなって気持ちが悪い。だが、やるのが一瞬遅かった。
『轟少年確保！』
「何？」
「油断したね！」
俺に集中している今、背後を気にしている余裕がなかったのだろう。俺を行動不能にしたのはいいが、周りに目を向けられないようじゃまだまだである。これはチーム戦ですよー？
「待っててね須一くん！障子くん捕まえてくるから！」
できれば早くしてね。死んじゃうから。
「……」

「お？」
なんか眠たくなってきたなぁと思っていたら、焦凍が溶かしてくれた。まだ訓練終わってないのに。
「死なれても困るからな」
「おーさんきゅ。かせいにはいかないからあんしんしろ」
うまく舌が回らない。幼児みたいになってる。このままでは女子から可愛いと人気になってしまうこと間違いない。参ったな、俺はカッコいいで売ってるのに。
「次」
「？」
焦凍は自分に巻かれた確保テープを見て一瞬眉間に皺を寄せると、俺を見た。
「次は負けねぇ」
「まけ、ねぇ？」
負けないだと？俺が凍らされて、透ちゃんがこなかったらそのままだったのに？どうみてもタイマンの勝負は焦凍が勝ってたのに？
「喧嘩売ってんのか！」
「なんでそうなる」
「タイマンは俺の負けだったろうが！チームとしては勝ったかもしれねぇが、そもそも不意打ちが決まったからで正面から行けばテメェは無傷だった！それで『次は負けねぇ』だ？ふざけんな！俺はこれを勝ちだと認めねぇぞ！」
『敵チームＷＩＮ!!』
「勝ったってよ」
「……納得してねぇ!!」
舐めたことを抜かす焦凍を置いて俺は下の階に下りて行った。感覚がまだなかったから転げ落ちてしまった。肩を貸してくれた焦凍には素直にお礼を言おうと思う。ごめんね、口汚い言葉使って。いいやつなのに。

第７話　委員長は誰だ！

この世にはどうしても近づけないものがあると思う。例えば今物凄く機嫌悪そうに出て行った勝己とか。

授業は終わり、放課後になってさぁ出久を待とうとみんなで教室にいようとしたとき、勝己は黙って出て行ってしまった。何か声をかけてやるのが友だちというものなのだろうが、今は俺じゃない気がする。俺は考えるのが苦手なのでこれは直感だ。

ちなみに、俺たちに対する講評は「轟少年には慢心があった」というのが全体的なもの。目蔵は焦凍の力を信頼して任せるのはわかるが、氷結した後中に入るのが遅れたことを指摘されていた。俺たちのチームは及第点。強いて言えば俺に油断があったと言われてしまった。そりゃ他のメンバーに氷結避けろって言っといて自分は凍らされるって、油断以外のなにものでもないもの。

はがれた足の皮はすっかり治った。リカバリーガールはやはりすごい。ただ、俺はあまり体力がないので大怪我には気を付けよう。治るから怪我をしていいってものでもないし。

「おお！緑谷きた！お疲れ!!」

話は戻るが、今の勝己を動かすとすれば今教室に帰ってきた出久だろう。勝己と出久の二人には因縁というか、とにかく他人は触れられない何かを感じるし、証拠に出久は勝己が帰ったと聞いて走っていってしまった。みんな出久を待っていたというのに。

「んー、じゃあ帰るか」

「お、須一お疲れ！」

ばいばいとかまた明日とか言ってくれるみんなに手を振って教室を出る。

俺自身、今回の結果にまったく納得していない。俺は焦凍に負けていたし、もしあれが現場だったなら俺は一度死んでいる。敵は情け容赦なんかないから、俺は一瞬で凍らされていたことだろう。それこそ、焦凍と会ったその瞬間に。俺は今日一度死んだのだ。

「ならば俺はニューー成！つまり世界一強い男！」

ただ、いつまでもうじうじするなんて性に合わない。俺は世界一切り替えが早い男。

いつも通り世界一早い切り替えをした翌日。俺はいつも通り世界一早く登校していた。
はずだったのだが。
「雄英生ですか？オールマイトについてお聞かせください！」
なぜか雄英の前でインタビューを受けていた。俺は登校していただけなのに。しかしメディアに愛想よくするのはヒーローたるもの当然のこと。ここは明るくしっかり答えなければ。
「俺は須二一成！世界一切り替えが早い男です！」
「え、あの、あなたのことではなく」
「応援よろしくお願いします！それでは！」
丁寧に答え、捕まる前にその場を後にする。だってオールマイトの授業一回しか受けたことないのにそんな答えられることあるわけないじゃん。それに答え始めると調子に乗っちゃっていくらでもしゃべり続けちゃうし。俺は俺のことをよく理解している。
いつも通り教室に入り、暇な時間を過ごす。予習でもしようかと思ったが気分が乗らない。俺は試験直前になって焦るタイプだ。そしてそういうタイプは得てして普段からの勉強に向いていない。
というわけでだらだら過ごしていると、やがてみんなが続々登校してくる。やはりみんなもインタビューを受けたようで、話題はそのことで持ちきりだ。別に自分たちのことを聞かれているわけではないのだが、それでもインタビューを受けるのは心なしかテンションが上がるもので。
「勝己、おはよう！」
「おう」
返事をくれたのを見ると、勝己もテンションが上がっていたのだろうかと勝手に考える。もしかして距離が近づいたのかも？
「おい」

「ん？どした」
　返事をくれたことすら珍しいのにすぐ自分の席に行かず立ち止まった。なんだ、俺と語り合おうというのか。
「俺が一番になる。わかったか」
「はぁん？俺が世界一だって何度言えばわかるんだ？」
　どうやら違ったらしい。友情を深め合うかと思いきや喧嘩を売りに来たようだ。さては昨日の鬱憤を晴らそうとしているのか？陰湿なやつめ！いや、正面からきてるから陰湿でもないのか？わからん。
「テメェ昨日負けてるじゃねぇか。アレで世界一たぁ随分吠えるな」
「もう俺の方が強いですー！俺を昨日までの俺だと思うなよ！ニュー一成となったんだ、俺は！」
「けっ、言ってろザコ」
「なにぃ!?」
　言いたいことだけ言って自分の席に行った勝己を追おうと席を立ちあがると、ちょうど先生がきてしまった。あいつ、あれがわかって俺のことをぼろくそに言いやがったのか。許さん。
　まぁでも、いつも通り口の悪いアイツで安心した。そんな会ってから日経ってないけど。
「昨日の戦闘訓練のVと成績見たぞ。お疲れ」
　先生から発せられたのはまずねぎらいの言葉だった。あの俺がダサいVはぜひとも消してほしいと思うが、悔しさを思い出すために残しておく方がいいだろう。ただその悔しさを思い出すまでもなく俺は世界一になるのだが。勝己と焦凍を越えてな！
　全員をねぎらった後は、勝己と出久に注意が飛んだ。「ガキみたいな真似はするな」と個性の制御について。確かに勝己はガキみたいだったし、出久はいつもボロボロになっている。やーい勝己、怒られてやんの。
「うおっ」
　俺の心が読めているのか、勝己が少し首を後ろに向けて睨んできた。もしかしてエスパー？
「さて、本題に入ろう。急なことだが君らに学級委員を決めてもらう」

「俺は世界一学級委員に相応しい男!!」
「テメェは床でも舐めて掃除してろ！俺がやる！」
「ということは喧嘩して勝った方が学級委員ということでいいな!?」
「待ちたまえ！学級委員とはそのような手法で決めるべきものではない！」
　勝己と喧嘩を始めようとすると、天哉に止められてしまった。確かに周りを見ればめちゃくちゃ手があがってて俺たち以外にやりたい人もいるし、先生もキレかけている。へへ、冗談ですよ冗談。
「学級委員とは多を牽引する責任重大な仕事！ならば多くの信頼を勝ち取った者こそが学級委員をやるべきではないだろうか！つまり、投票で決めることを提案する！どうでしょうか先生！」
「時間内に決めてね」
　なるほど、まだ信頼関係の浅い今複数票を取った者こそ学級委員に相応しいということか。これは俺にチャンスがあるのでは？初日から声かけまくってたし、いけそう。勝己と何回も喧嘩しようとしてるけど、そんなこと目を瞑ってくれるさ。
「勝己！俺に入れろ！そうすりゃ委員長権限でお前を副委員長にしてやる！」
「テメェが俺に入れろ！そうしても副委員長にはしねぇけどな！」
「じゃあ入れねぇ！」
「入れろっつってんだろ！」
「「やんのか!?」」
「君たち早くしないか！」
　天哉に急かされてしまったので自分に入れる。勝己もなんだかんだ言って俺に入れてくれることだろう。いや、ないな。
　そして開票。結果は。
「僕三票ー!?」
「やーい勝己一票ー！」
「テメェも一票だろが！クソッ、なんでデクに三票入ってんだ！」
「人望の差ってやつじゃね？」
「だからテメェも一票だろ！」

出久が三票で百ちゃんが二票。天哉と焦凍とお茶子ちゃんはゼロ票であとは全員一票。出久に入れたのが天哉とお茶子ちゃんで、焦凍が百ちゃんに入れたのだろう。天哉とお茶子ちゃんはわかるが、焦凍は……そういえば推薦組だったか。
「よし、なら委員長緑谷で副委員長八百万で決定な」
「勝己、ここは協力してあいつら沈めるっていうのは」
「乗った」
「やめてよ!?」
冗談だって、と笑っておいたが、勝己の目はマジだった。アイツほんとどうにかした方がいい。
その日の昼休み。
「飯行こうぜ勝己！」
「一人で食っとけ！」
「だってよ！鋭児郎と電気もくる？」
「おう！行くぜ！」
「だってよ、のつながりが俺には見えない」
「何増やしてんだ！」
言いつつ、勝己は本気で拒絶しないので普通についていく。実は一人で食べるの寂しいんだろ。ふふ、わかっている俺は触れないでおいてやろう。思春期男子のそういう部分に触れるのはよくない。
雄英の食堂にはクックヒーローランチラッシュがおり、一流の料理を安く食える。俺の好きな寿司まであったのは驚いた。流石最高峰というべきだろうか。
「勝己何にした？」
先に座ってみんなを待っていると、勝己が対面に座った。トレイの上には赤いもの。
「赤くて辛いやつ」
「お前に味覚と食を楽しもうっていう気持ちはないの？」
「あ？楽しんでんだろが！」
「辛いのは男らしいよな！」
「鋭児郎の男らしさ基準ってよくわからんよな」

電気が純粋な疑問を口にすると勝己がキレて、鋭児郎が独自の男らしさ理論で勝己を褒める。褒めているのかどうかは分からないが。
でも辛い＝男らしいってのはわからんでもない。忍耐力鍛えられそうだし。勝己涼しい顔して食ってるけど。ところでなんでそんな赤い劇物が食堂にあるの？
「つか寿司ばっかだな。飽きないのか？」
「こいつ舌バカだから何食べても一緒なんだよ」
「んなわけあるか！ただ寿司好きだから寿司ばっかでも飽きないってだけだ」
「バカではあるな」
ショートしたらアホになる電気には言われたくない。好きな物はいくらでも入るだろ。勝己もバカみてぇにバカみたいなもの食ってるし。あいつ辛味と赤さだけで食べ物判断してるだろ。
まぁバカと言われても俺は実際頭がよくないので別にいいかと思い寿司を口に運ぼうとすると、いきなり警報が鳴り響いた。うるせぇ。
『セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに屋外へ避難してください』
「セキュリティ3？」
「雄英にあるセキュリティのことだろ。3ってこたぁ校舎内にカスが入ってきたってことだ」
聞きなれない言葉に首を傾げていると、勝己が好戦的な笑みとともに教えてくれた。赤くてよくわからないものは既に平らげたようで、準備万端と言わんばかりに手をわきわきさせている。
「あぁ、辛いものを食べるのは汗をかくためか」
「今言ってる場合か！逃げるぞ！」
「既に逃げ遅れてるし！」
「まぁ落ち着けって。どうせ今いってもごちゃごちゃんなってわけわからなくなるだけだし、ここはヒーローらしく避難誘導でも」
「大丈ー夫!!」
しようとしたその時。『ＥＸＩＴ』の上に天哉が張り付いた。

「モード『ｅｘｉｔ』……」
「ただのマスコミです！何もパニックになることはありません！」
「なんだマスコミか」
「報道精神もここまでくると大したもんだぜ」
モード『ｅｘｉｔ』の天哉の声により、混乱は収まった。俺も報道陣がきていたとわかっていれば同じようなことができたものを……！
「ん？勝己どした」
混乱は収まって何も危険はないとわかったはずなのに、勝己が難しい顔をしていた。まさか敵じゃなくて残念だとか？まさか勝己といえどそこまで不謹慎ではないだろう。
「いや」
勝己はそこで一度切って、外を眺めながら言った。
「マスコミ如きに雄英のセキュリティが突破できんのかと思ってな」
「……確かに」
偶然機械が誤作動を起こしたのかもしれないが、最高峰の雄英でそれは考えにくい。
何か嫌な予感がする。が、今は飯だと切り替えて寿司を楽しみ、昼休みが終わって。
「委員長はやっぱり飯田くんがいいと思います！」
「俺ではなく!?」
「いや、あの、須一くんももちろんすごいんだけど！」
他の委員を決めようというときに、委員長である出久から衝撃の一言が。多分あの食堂での一件だろう。確かに委員長らしい行動ではあった。多を牽引するっていう言葉にぴったりの。
「うーあー」
また一番になれなかった。これは打倒天哉を掲げるしかないと固く心に誓った。

第８話　ＵＳＪにて

水曜日ヒーロー基礎学。
「今日のヒーロー基礎学だが、俺とオールマイト、そしてもう一人の三人体制で見ることになった。今回は災害水難なんでもござれ、人命救助（レスキュー）訓練だ！」
レスキュー。戦うところが派手で目立ちやすいが、これこそヒーローの本分と言えるだろう。俺の個性は応用、というか使い道が多いので役立つこと間違いなし。
「響香ちゃんはレスキュー向いてそうだよな。ほら、助けを求める声聞けるってデカくない？」
「見つけてからどうするかだけどね」
「そこは俺みたいなオールラウンダーがいれば解決よ！」
「おい、まだ途中だぞ」
先生もっとフレンドリーにいきませんか？あなた睨むと怖いんですよ。しかも先生に怒られるたびに勝己がムカつく顔でこっち見てくるし。怒られるようなことするなって話なんだけども。
「今回コスチュームの着用は自由だ。訓練場は少し離れた場所にあるからバスに乗っていく。以上、準備開始」
本当に必要なことだけ言う人だな。そんなんじゃモテないぞ。これで何かしらのギャップがあるなら別だけど。
各々準備してバスに乗りこむ。乗る前に天哉が番号順で二列に並ばせていたが、バスの座席のタイプ的にまったく意味をなさなかったため結局自由に座った。
「お隣お邪魔しますね」
「くんな！」
俺は勝己の隣に無理やり座る。こいつと隣になる人が可愛そうだしね。今もなぜか鬼の形相で俺を睨んできてるし。確実に俺のせいだけど。
「勝己ってレスキューできんの？口悪いのに」
「できるわ！助け倒したろか！」

「助け倒すっていう表現使うやつには向いてないと思う」
　こいつ絶対要救助者に対して優しい言葉かけないよな。やることはやるけどいつも通り口悪く叫び散らして悪印象を与えそうだ。その点俺はきちんと声掛けができるらしいし、レスキューでは俺の勝ちだな。レスキューは勝ち負けなんてそういう話ではないが。
「派手で強えっつったらやっぱ轟と爆豪だよな」
「俺は!?」
　前の方で人気とか強さとかの話をしていたグループからこちらに話が飛んできた。しかし『派手で強い』の枠組みに俺が入っていないのはどういうことか。
「ハッ、テメェが弱えからだろ」
「勝己も出久に負けてんじゃん」
「テッ、メェ」
「あいつ軽々と地雷を踏みぬきやがった！」
「強いかもしれない」
　めちゃくちゃ顔が怖くなった勝己から目を逸らして口笛を吹く。出久が青い顔してあわあわしているが、君は誇っていいんだから堂々としていればいい。今この段階では俺と勝己は負けているのだから。
「そんな怖い顔してたらヒーローになっても人気でねぇぜ？その点俺はほら、フレンドリーでしかもイケメン」
「テメェにだけは何においても負けねぇ！人気出してテメェの人気を地の底に突き落とす！」
「やってみろ！泣いて『あなた様の人気をくださいー』つってもやらねぇからな！」
「あげるほどの人気出ねぇだろ！」
「おい、もう着くぞ。いい加減にしとけよ」
　また怒られてしまった。最近勝己と額をぶつけ合う回数と先生に怒られる回数が比例してきている気がする。由々しき事態だ。このままでは先生に問題児だと認識されてしまう。既に認識されている気もするが、それは気のせいだ。俺ほどの優等生など他を探してもどこにもいないだろう。

バスが停車し、目的地についた。バスを降りると、目の前には何かテーマパークのような、しかし明らかに遊ぶ施設ではないものがあった。
「ＵＳＪみてえだ！」
「ここはあらゆる事故や災害を想定し僕が作った演習場、ウソ[U]の災害[S]や事故[J]ルーム！」
ＵＳＪなのかよ。絶対意識して作っただろこれ。
説明してくれたのはスペースヒーロー１３号。宇宙服のようなものを着ている、災害救助のエキスパートともいえる人だ。その個性はブラックホールで、何をも吸い込み吸い込んだものを塵にする。勝てなくない？
「えー始める前にお小言を一つ、二つ、三つ、四つ……」
「五つ……」
「増やすな、コラ」
ノリで言ってみたら勝己に蹴られてしまった。人のケツを蹴るとはどういうことだ。
「皆さんご存知だとは思いますが、僕の個性はブラックホール。人を簡単に殺せてしまう個性です。みんなの中にもそういう個性を持った人がいるでしょう」
俺の個性も人を殺せるといえば殺せるし、勝己はもうすでに人を何人か殺してそうな顔をしている。顔の話かよ。
「超人社会は一見個性を資格制にし厳しい規制の下で成り立っているようには見えますが、一歩間違えれば容易に人を殺せるいきすぎた個性を持っているということを忘れないでください」
俺も、中学くらいのときに父さんからそれについて話してもらったことがある。俺のモード『ｐｏｗｅｒ』はそれこそ本気を出せば人の骨を容易に砕くパワーを持っており、調整を間違えればあっさりと人を殺してしまう。だから、父さんは「ヒーローは戦うための力じゃなく、救うための力を伸ばすべきだ」と言っていた。カッコいい父親だぜ！
「相澤さんの体力テストで自身の力が秘めている可能性を知り、オー

ルマイトの対人戦闘でそれを人に向ける危うさを体験したかと思います」
　俺は自分の実力の位置を知りました。個性の上限値が未熟なだけで、調整自体は得意だからその辺りは心配していない。かといって余裕ぶっこくわけではないが。
「ですが、この授業では心機一転！人命のために個性をどう活用するかを学んでいきましょう！君たちの力は傷つけるためにあるのではなく、助けるためにあるのだと心得て帰ってください」
「かっちょええ」
「敵を殺せば早ぇだろ」
「ブレないな勝己」
　素晴らしい演説に胸を打たれた人が多い中、勝己は憎たらしい顔で「殺す」などという話を一ミリも聞いていなかっただろうと詰め寄りたくなる発言を平気でした。そこが勝己らしいというかなんというか、ブレない自分を持っている人は尊敬できると思う。俺の次に。
「そんじゃあまずは……」
　１３号先生の演説が終わり、相澤先生が指示を出し始める。また怒られるのは嫌なので静かにして相澤先生の指示を待っていると、先生が黙ってしまった。１３号先生に影響されて何かいいことを言おうとしているのだろうか。そのままの先生が素敵なんだからいいんですよ？
「一かたまりになって動くな!!」
　初めて聞いた先生の大声は、もの凄く緊張感のあるものだった。
「１３号！生徒を守れ！」
　その先生の視線の先に、何か黒いモヤから大量の人が出てきた。人かどうか怪しいやつもいるが、異形型なだけで普通の人かもしれない。そんな人を人じゃないなんて言ったら差別にあたる。
　というか。
「敵か」
　先生がドッキリをしかけているのなら敵ではないが、素人でも感じるやつらの嫌な感じであれは敵だと理解できた。今まで敵に襲われ

たことがないからどんなものかわかっていなかった。自分に向けられる悪意がどれほどのものか。
「勝己、アレ見ても殺すって言える？」
「上等」
　なんというか、いつもと変わらないやつがいると安心するな。いや、ビビってるわけじゃないんだけどね？ただ、加減が難しいというかなんというか、敵に対してどう個性を使うのが正解なのかどうもわからないってだけで。
「でも戦う機会はなさそうっていうか、許してくれなさそうだ。避難だってよ」
「いや、そうでもなさそうだ」
　相澤先生が一人で敵のところに向かい、俺たちは避難しようとしたその時。目の前に黒いモヤが広がった。
「初めまして、我々は敵連合。僭越ながらこの度雄英高校に入らせて頂いたのは……平和の象徴、オールマイトに息絶えて頂きたいと思ってのことでして」
「ハァン!?テメェらみてぇな有象無象が？オールマイトを？殺す？オイオイ勝己！最近の敵はジョークがお上手みてぇだ！」
「なんだそのテンション」
「あと勝己、行くなよ。相手の個性がわからない以上１３号先生に任せた方が断然いい」
　隣から爆発音が聞こえた。遅かった。
「バカ！それじゃブラックホールが使えねぇって！」
　黒いモヤに攻撃した勝己と鋭児郎を注意するが、もはや無意味。あのモヤは相澤先生のところから一瞬でこっちにきた。ということは少なくともあの距離を一瞬で移動できる手段を持っているということであり、つまり。
「散らして、嬲り殺す」
「やっぱり！」
　全員のところに黒いモヤが伸びてきた。恐らくこれに入ると別の場所へ移動させられる。ということはそれを予想していた俺がする

べきことは、人数が少ないところへ行くようにすること。
「猿夫！」
　パッと見た限り一人になりそうだった猿夫のところへ向かう。焦凍も一人だったが、焦凍か猿夫のどちらについていくべきかとなると、猿夫だろう。一人で大丈夫だというわけではないが、わかりやすい強さを基準にして考えるとそうなる。
　そして黒いモヤに飲まれ、出た先は。
「あっつ！」
「火災ゾーンか……」
　火災ゾーン。多くの建物があり、大体燃えている。どういう原理で燃やし続けているのだろうかとか地球温暖化は大丈夫だろうかとか色々気になることはあるが、今は置いておく。
　問題は、目の前にいる大量の敵だ。
「お、きたきた。かわいそうなガキが二人も」
「暑いだってよ。熱に耐性がないやつは苦労するな」
「なるほど。ということはそれぞれの災害ゾーンに適した敵がいるとみてよさそうだ。となるとここにいるのは火の個性か、ただ単純に耐性があるだけか。何にしろ……スイッチ。モード『ｓｐｅｅｄ』」
「ちょ、須一？」
「手っ取り早く全員倒す。無理そうなら逃げる。これでいいだろ」
　今ここで逃げる選択肢をするとどこに行くかわからない俺たちではなく、他のゾーンに加勢に行くかもしれない。ならば俺たちがここで食い止めなければならないというわけだ。ヒット＆ａｍｐ：アウェイでしのぐというのもアリだが、俺のヒットはすなわち撃破。モード『ｓｐｅｅｄ』からのモード『ｐｏｗｅｒ』を舐めてもらっては困る。
「さぁ後悔しろ！この世界一強い俺の前に現れたことをな！」
「現れたのはそっちだろ」
　戯言をほざく敵をぶちのめすため、風のように駆け出した。

第９話　戦闘、火災ゾーン

個性の使い方はどこで教えてもらうのが普通なのだろうか。小学校中学校では個性の使用は禁止され、かといって外で使えるかと言えばそうでもなく、使えるのは家族以外にバレないであろう家の中でのみ。

大体の個性は自身の成長、年齢を重ねるにつれ馴染んでいくものだ。俺の場合、少し違う。

モードをスイッチするごとにくる体への負担。更にスイッチできるモードの模索。身近にその系統の個性を持っている人がいなかったから、俺は独学で自分の個性を伸ばすしかなかった。いや、大きく捉えれば父さんと俺の個性は似ているのだが、父さんのは純粋な発動型の増強系。対して俺の個性は発動型と変形型の二つを併せ持つ複合型。更にスイッチしなければ何も現れないというゼロからの模索つき。

そんな俺がしたことはただ単純なこと。

「スイッチ。モード『ｐｏｗｅｒ』！」

努力。ただ己の可能性を信じ、体をいじめ抜くことだった。そして初めに出てきたのがモード『ｐｏｗｅｒ』。俺の筋力の増加によりいきなり出てきたモード。出た当初は通常のモードに戻る方法がわからず、体力が尽きたことで元に戻り、そのまま入院した。体がバキバキになって１ミリも動けなかったのだ。

「なんだこいつ！いきなりゴリゴリになりやがった！」

「一気に三人なぎ倒したぞ!?ほんとに人間かアイツ！」

インパクトは十分。俺は一度猿夫を見て、アイコンタクトをとった。後ろは任せるぞ、という意思を込めたのだが、果たして伝わったかどうか。

「スイッチ。モード『ｓｐｅｅｄ』！」

そして次に出てきたのがこのモード『ｓｐｅｅｄ』。初めは速すぎて直進しかできないザコモードだったが、今はなんとか曲がれるようになった。これが出たときは通常のモードに戻る方法もわかってい

たので苦労しないかと思ったが、脚がバキバキになりまた病院送り。更に脳への負荷もかかっていた。
　つまり、俺の個性はスイッチする度に体と脳へ負担がかかる。そしてここは火災ゾーン。徐々に酸素を奪われ、時間が経ちすぎると脳へのダメージも出てくる。だからここは速攻で片づけなければならない。幸い、俺は元々速攻タイプだ。
「オラァァァァァァ!!おせぇぞテメェら!ガキ一匹にやられて悔しくねぇのか!?」
「こいつほんとにガキかよ!あの尻尾のやつも普通につぇぇし!」
「あぁ!普通だがつぇぇ!」
「そりゃ須一に比べたら普通かもしれないけどさ……」
　というか『スイッチ』って言わなくてもモード切り替えられるんだね、という猿夫の声は無視して次々に敵を蹴散らす。別に『スイッチ』と言うことに意味がないわけではない。アレは脳に「今から切り替えますよ」と伝えるという役割があり、アレを言うだけで少し負担が軽くなるのだ。ただ戦闘において『スイッチ』と言うのは「今からモード変えますよ」と敵に伝えるようなものなのでできる限り言わないようにしているだけだ。
「須一後ろ!」
「死ねやコラ!」
　猿夫の焦った声が聞こえ、背後から敵の物騒な言葉が聞こえる。ふむ、背後をとって至近距離にくるということは遠距離手段を持っていない可能性が高い。ということは何かしらの直接攻撃をしかけてくるということ。
「スイッチ。モード『ｈａｒｄ』！」
「いっ、てぇぇぇぇぇぇぇぇ!?」
　俺のモード『ｈａｒｄ』は見る限り鋭児郎よりも硬い。その代わり動けないわけだが、こうして攻撃を防ぐにはちょうどいいモードだ。
「ほんと便利だなその個性!」
　モードを解除して背後の敵をなぎ倒そうかと思えば、猿夫が尻尾で弾き飛ばしてくれた。ありがたい。普通に強い個性だ。

モード『ｓｐｅｅｄ』とモード『ｐｏｗｅｒ』の繰り返しでなぎ倒していけばあと一人。そんなに倒した記憶はないが、猿夫が結構やってくれたのか。ほとんど俺が倒して猿夫はもしものときのために体力を温存してもらう予定だったのだが嬉しい誤算だ。
「くっそ、ほとんどが個性を使う間もなくやられちまった……！」
「おう、それは俺が世界一強いからだ。気にすることはない。ただ相手が悪かった！それだけだ！」
指をつきつけ、さぁ最後だと踏み込もうとしたその時。
「ち、っくしょぉぉおおお!!」
「な、あっぶねぇ！」
敵の一人が何かを自分に打ったかと思うと、敵の体から膨大な量の炎が溢れだした。炎の波は俺たちを飲み込もうと気づけばすぐ目の前まで迫ってきている。俺はそれを反射的にモード『ｓｐｅｅｄ』で横に避けると、すぐ隣を炎が通り過ぎて行った。
「猿夫！無事か!?」
「無事！けど、何だアレ。何か打ってたよな？」
炎が溢れだす直前。確かにあの敵は自分の首に注射器のようなものを打っていた。俺の知識が正しければ、あれは。
「多分、個性をパワーアップさせるクスリだ。父さんからそういうのがあるって聞いたことがある」
「それって違法じゃないのか？」
「完全に。海外じゃどうかわからんが、少なくとも日本ではアウトだったはずだ」
炎の壁越しに会話する。こんな派手な炎エンデヴァーくらいしか見たことがない。敵の様子から見て何かクスリを使ったのは明らかだ。
「はは、すげぇ！すげぇぞ俺！おい、この力がありゃテメェらなんざ怖くねぇ！かかってこい！」
「猿夫、引くぞ」
「え？」
「あのクスリが日本産なら効果時間が短いはず。詳しい長さはわから

んが、どっちにしろあんな炎出す相手に近接戦闘しかできない俺たちが相手するべきじゃない」
「……意外だな。須一はこういう時敵に向かっていくと思ってた。わかった」
猿夫も俺が言ったことと同じことを思っていたのか、敵がいる方向とは逆の方へと走る音がした。よし、これで猿夫は安心、と。
「ごちゃごちゃうっせぇぞ!!」
向かってこない俺たちに痺れを切らしたのか、敵がまた炎の波を放ってくる。猿夫はすでに逃げ始めているからこの炎の波が届くことはないだろう。無駄に逃げる手段が豊富な俺もこれに飲まれることはない。
「スイッチ。モード『ｊｕｍｐ』」
そして、個性を使い慣れていない敵に制裁を加えるべくスイッチする。炎の波が俺のところへ来る前に高くジャンプし、無理やり空中で体勢を変えて天井を蹴った。向かう先は敵のところ。俺が体操選手かなにかならうまいこと体勢を変えられるのだろうが、ここは要練習である。
敵は今の炎で仕留めることができたと勘違いしているのか、正面だけ見て高笑いしていた。わかる。いきなりすごい力を手に入れると自分はすごいやつだ、なんでもできるんだって思っちゃうよね。俺もそうだった。
そうやって慢心すると後でひどい目にあうというのが世の常である。
「じゃあな敵さんよ!」
「は?」
敵と接触する直前に声をかけると、敵は間抜け面して俺の方を見て。
その顔面に勢いを乗せた拳を叩きつけた。角度的には死なないはず。父さんから教えてもらった人の殴り方は間違いない。
敵を殴り飛ばした俺は瞬時にモード『ｈａｒｄ』にスイッチし、骨を守った。あのままだと全身ぐちゃぐちゃになってたからね。モー

ド『ｈａｒｄ』にすると痛いものは痛いが見た目無事になるから重宝する。繰り返して言うがめちゃくちゃ痛い。
「須一！逃げるって言ってなかったか!?」
　猿夫が敵を攻撃しにいった俺に気づいていたのか、モードを解除した俺に駆け寄り手を引っ張って起こしてくれた。心なしか怒っているように見える。まぁ下手したら燃やされる可能性もあったし、怒るのも当然か。
「悪い。アレ嘘。敵に自分の視界を塞ぐような炎出して欲しかったから、敵に聞こえるよう逃げるのを提案しただけだ」
「結果的にはよかったけど、あの場面は逃げるのが正解だっただろ？」
「それはわかってるんだけど、なんかさ」
　俺は猿夫から離れて先ほどぶっ飛ばした敵の懐を漁り、注射器を取り出した。
「クスリ持ってるってわかってて、助けがくるかどうかもわからないならやるしかねぇかなって。日本製で効果時間が短くても、それが何発あるかわかんなかったし。二発目ありましたーってなったときに逃げて遠くへ行ってたとしたら近づくのは難しい。かといってそのまま逃げだせば暴れまわる炎の敵が他のところに行きかねない。ならここでやった方がいいかなって」
「……須一、考えるの苦手だって言ってなかったっけ？」
「別に、できないとは言ってないぜ」
「カッコよくないぞ」
「いてっ」
　キメ顔で言ったら叩かれてしまった。ひどい。
「で、これからどうする？」
「そうだなぁ。一緒に行動するのは当然として、こっから近いのは山岳ゾーンと水難ゾーン。水難は行っても役立たずだから山岳ゾーンに行こう」
「あれ、なんでゾーンがどこにあるか知ってるんだ？」
「入口から見た時に覚えた」
　俺は自分の興味があることならすぐに覚えられるんだ。勉強もこ

うだといいのに。
「よし行こう。前は俺が行くから後ろは任せた！」
「任された」
言って、俺たちは山岳ゾーンへ向かった。猿夫、尻尾使って移動するのね。

第１０話　人間砲弾

山岳ゾーン。岩場の上に立っても戦闘音は聞こえない。
「これくる必要なかったか？」
「できればいい意味でだといいけど」
どこに敵がいるかわからないので周りを警戒しつつ慎重に歩く。戦闘音が聞こえないのは全員倒したからか、それとも倒されたからか。倒されたというのは信じたくないが、ない話ではない。いくら敵がチンピラ同然でも不運が重なってやられることもありえる。考えたくなくても可能性として心にとめておかなければならないだろう。
「猿夫」
「うん」
音を立てないように歩いていると人の姿が見えた。向こう側から身を隠すために岩の陰に隠れ、様子を窺う。
「電気と、響香ちゃんと、百ちゃんか」
「上鳴は敵に捕まってるおまけつきだ」
俺たちの視線の先には敵に捕まっている電気とそのせいで動けないでいる響香ちゃんと百ちゃんがいた。周りには多くの敵が倒れているため、なんらかの方法で全員を倒したと油断したときに電気が捕らえられたといったところだろう。幸い敵の背後に俺たちはいる。感知タイプでなければ一気に詰めて倒せるのだが。
「どうやって助けるか。敵のところにたどり着く前にバレたらマズいよな」
「うん。少しでも違和感を持たれて上鳴に手を出されたらアウトだ」
モード『ｓｐｅｅｄ』を使ったとする。アレは世界一速いが、足音が消えるわけではない。相手の個性が何かわからない以上、できるだけバレないようにしなくてはならない。となると。
「猿夫、尻尾に乗せてくれね？」
「尻尾？どうするんだ？」
「人間砲弾さ。スイッチ。モード『ｊｕｍｐ』」
モード『ｊｕｍｐ』にスイッチし、猿夫の尻尾に乗る。こうすれば

足音もなく敵のところへ行ける。更に着いた時には敵を倒せているというすばらしい作戦だ。有能が過ぎる。
「じゃあ、行くぞっ」
気合いの声とともに、一振り。そのタイミングに合わせて俺は猿夫の尻尾を蹴った。
「っ!!」
尻尾の威力とジャンプの勢いが合わさり、もの凄い速さで敵の下へ飛んで行く。俺は顔の前で腕を交差させ、着弾の構えをとった。
「そっちへ行く、決して動くなよ」
敵の声が小さくだがはっきり聞こえる。見れば、もう目と鼻の先。あまりに速かったため直撃に備える体勢も満足にとれず、俺は無様に敵と衝突した。
「ぐふぉおあ!?」
「助太刀っ！」
俺は敵の背中と衝突し宙に放り出された。敵の様子を見ると地面に倒れ、ピクリとも動かない。よし、倒すことはできたらしい。もしかしたら骨がぽっきりいってるかもしれない。
「スイッチ。モード『ｈａｒｄ』！」
このままでは岩に激突して体がぐちゃぐちゃになるのでモード『ｈａｒｄ』にスイッチする。ほとんどガチの砲弾になった俺は岩に激突して岩を粉々に破壊した。壊れた岩が俺に乗っかってこなかったことが唯一の救いである。モード『ｈａｒｄ』の時は動けないから、岩をどかすこともできず、解除すると普通に潰されるからだ。今思うと結構な博打だったのでは？
「えっ、あ、須一!?」
「無事だぜー響香ちゃん。そっちは？」
モードを解除すると、戸惑いがちな響香ちゃんの声が聞こえたので軽く答えておく。そりゃいきなりクラスメイトが飛んできて敵を弾き飛ばし、そのまま岩を粉々にしたら誰だって困惑するよね。実際にやった俺もあまり記憶がないくらいだから。
「こっちも無事！あんがとね。何やったかわかんないけど」

「俺は砲弾と化したんだ。あと腕がまったく動かん」
「無事じゃなくない？」
　命があったら無事なんだ。そういうことにしておこう。
「ありがとうございます、須一さん。あなたがいなければどうなっていたことか」
「いやいや。礼なら猿夫にも言ってくれ。さっきのはアイツの協力があってこそだ」
「須一一人でもなんとかなってたと思うけどね」
　そう言って謙遜するが、実際前に跳ぶことが得意ではない俺にとって猿夫のサポートは大分ありがたかった。あの距離を自分の力だけで跳ぶのは無理だったし、俺一人で隠密行動の上敵を倒すのは無理だっただろう。
「んなことないって。めちゃくちゃ助かった。……んで、あのおもしろおもちゃは？」
「ウェ、ウェ～イ」
　敵の個性にやられてしまったのかと疑ってしまうほどヘロヘロになった電気が、奇怪な動きで「ウェ～イ」と言い続けている。W数が許容オーバーすると脳がショートしてアホになると本人が言っていたが、まさかここまでとは。めちゃくちゃな弱点じゃないか。
「ウェ～イ」
「あ？まぁそうだな。そこは許容上限を上げるしかないだろ」
「会話できてる……」
「心を読むモードですか？」
「知能指数が一緒だから？」
　俺が電気と普通に会話すると、猿夫に驚かれ百ちゃんに変な勘違いをされ、響香ちゃんにバカにされた。確かに俺は頭がよくないが、この状態の電気と一緒にしてほしくはない。ただなんとなく言っていることがわかった風を装って適当に答えただけだ。
「心を読むモードでもないし、適当に答えただけだ。んで、これからどうする？俺としてはセントラル広場に戻るのがいいと思うけど」
「他のゾーンへの加勢は？」

猿夫の言葉に俺はドーム型になっているＵＳＪの天上に空いた穴を指した。
「あんなことできんのオールマイトくらいだろ。だからもう大丈夫だ」
「うわ、ホントだ。いつの間にあんなの空いてたんだろ」
「目の前の敵に夢中で気づきませんでしたわ……」
俺が指した天井の穴を見て、目を丸くする二人。電気は相変わらずちょこちょことアホしているのでもう無視することにした。
「よし、じゃあセントラル広場に向かおう。もしかしたらオールマイト以外の先生も助けに来てくれてるかもしれないし」
「正直俺もう戦えないくらい腕ぷらんぷらんだから、きてくれてるとすごくありがたい」
まだ回復の兆しを見せない俺の腕を気遣ってか、俺を間に挟んでの索敵陣形を組んでセントラル広場に向かうことになった。隣にいるアホはいつ元に戻るのだろうかと考え、徐々に戻ってきた腕を使って電気を小突いてみた。叩けば直るわけではないらしい。
「気を緩めないように」
「はい」
電気と遊んでいると百ちゃんから注意を受けてしまった。電気と顔を合わせて「じゃれてただけなのにねー？」と言うと、もう一度睨まれた。護送される犯人ってこういう気持ちなのかと考えながら大人しく歩いていると、セントラル広場が見えてきた。
「お、みんないんじゃん！」
「戻ってる」
ちょうどいいタイミングでアホから戻った電気がみんなの姿を見て我先にと駆け出した。脳がショートしていたはずなのに元気なやつである。俺はやっと普通に動かせるくらいには腕の感覚が戻ってきたところなのに。
「わ、五人一緒だ！みんな無事？」
「無事！俺たちが最後なのか」
「ザコ」

「あぁん!?」
　俺たちを見て話しかけてくれた透ちゃんにピースして答えると、憎たらしい勝己からの憎たらしいセリフが聞こえてきた。敵に襲われても勝己は平常運転らしい。平常がこれて、なんてやつだ。
「誰がザコだ誰が！」
「最後にきたことがその証拠だろ。あんな三下どもに手こずったのか？」
「俺たちのところにいた敵がクスリ使ってきやがったから他の人が心配だったんですー！俺はあらゆる可能性を見据えてるんでね！」
「クスリ？」
　敵から回収した注射器を出して勝己にキレていると、足元から声がした。この雄英において足元から声がしたら誰がいるかなんてわかりきっている。
「校長先生」
「そのクスリって個性をパワーアップさせるやつかい？」
　ネズミなのか犬なのか熊なのかはわからないが、とりあえず動物。それが雄英高校の校長である。目上の人なのでできる限り目線を低くするためにしゃがみこんで「はい」と答えると、校長は俺の足をぽんぽんと叩いた。
「お手柄だったね。でも、君たちはヒーローの卵であると同時に僕たちの生徒なんだ。正義感はいいけど、無理はしないようにね」
「心得ています。これ、渡しておいた方がいいですかね？」
「君が警察に渡した方がスムーズに話が進むだろう。持っておいていいけど、渡すときには呼んでね」
「わかりました」
　それだけ言って、校長は去っていった。それを確認して立ち上がると、勝ち誇った表情で勝己を見る。
「何が言いてぇんだ！」
「いや？まぁよかったんじゃないか？俺はみんなを助けに行って、勝己はセントラル広場の主犯格を潰しに行った。お互いの行動がわかっていたかのような動きじゃん。別に手柄がどうとかっていう話

はしてないけど、俺はクスリ持ってる敵も倒したし？」
「自慢してぇのが見え見えなんだよ！そんなもんはできて当然くらいに思っときゃいいんだ！」
「それもそうか」
　なるほど。学生の身でありながらもクスリを持っている敵を倒して確保するのはヒーローの卵として当然のこと。そう思えって堂々としておけば余裕が見え、更なる自信もついていく。いちいち手柄のことを口にするのはダサいということか。一理ある。
「すまん、俺が間違ってた。確かに俺の方が勝己より強いけど、手柄を振りかざすのは違うよな」
「おい、前半もちげぇ！俺のが強いわ！」
「いーや俺の方が強いね！何て言ったって名前に一が二つも入ってる！これは俺が一番であるという証拠！」
「なら俺は名前に勝が入ってるから俺の勝ちだろが！」
「子どもみてぇ」
　敵を倒したばかりだというのにいつも通り喧嘩していると、鋭児郎にバカにされた気がした。子どもみたいって悪口かどうかわからないところがある。子ども心があるって素晴らしいことだと思ってるし。俺は。多分鋭児郎はバカにしたつもりで言ったんだろうけど。
「そんなにどっちが強いかって揉めるなら、じゃんけんでもすりゃいいんじゃね？」
「誰がんなことするか！」
　鋭児郎の後ろから電気がひょっこりと顔を出して一つ案を出してくる。勝己はお気に召さなかったみたいだが、じゃんけんか。ここで一つ勝敗がつくならいいかもしれない。よし、ここは。
「あれ？勝己さん負けるのが怖いんですか？まぁ俺は何においても勝ってるからなぁ。そりゃ負けるとわかってる勝負はやらないか」
「し倒したるわ！先に三勝したほうが勝ちだぞ！」
「よっしゃきた！」
「やっぱ子どもみてぇ」
　わかりやすい挑発に乗ってきた勝己を倒すべく、勢いよく腕を振り

下ろした。ちなみに負けた。悔しい！

第11話　迫る体育祭

ＵＳＪでの事件が終わって。
家に帰ったら無事でよかったと母さんに手をとられぶんぶんされ、父さんによくやったと褒められた。父さん、仮にもプロヒーローなら危険な行動を注意した方がいいと思うんだけど。え？それはもう他の人がやってくれただろって？やはり父さんは天才らしい。オールマイトを追い抜く日は近い。
あんなことがあったので翌日は臨時休校。家でじっとするのは性に合わないから外に出ようとしたら、母さんに止められてしまった。色々言われたが、「考えなさすぎだろカス」的なことを言われた気がする。ごもっともです。俺まだ学生だもんね。大人しくしておきます。
そんなこんなで。
「みんなー!!朝のホームルームが始まる！席につけー!!」
「フルスロットルだな天哉」
「全員座ってるから意味ねぇけどな」
みんなの前に立って席につくよう注意する天哉だが、勝己の言うようにもうみんな座っている。なんせ雄英はエリートが集まる学校だからな。朝のホームルーム前に座らないやつなんていないだろう。中学の頃はむしろ立っていることの方が多かったけど。
「おはよう」
「相澤先生じゃん」
「ミイラみてぇ」
朝のホームルームの時間。ＵＳＪのアレでこっぴどくやられたらしい相澤先生はこないかと思ったが、全身に包帯を巻いたミイラのような姿で教室に現れた。そんなひどい状態ならお休みを貰えばいいのに。もしかして休ませてもらえないとか？俺は今日本の闇を見た。
「さて諸君。俺が無事なのを見て安心しているようだが」
「無事じゃなくね？」
思ったことをポロリとこぼせば、いつも通り先生に睨まれてしまった。なんだ、無事じゃん。

「戦いはまだ終わっていない」
「戦い？」
「敵か!?」
「雄英体育祭が迫っている！」
「オラァ勝己ブチ負かしたらぁ!!」
「上等だ！完膚なきまでにブチのめして床を舐めるだけの道具にしたるわ!!」
ちょっと、喧嘩売ったのはこっちだけどヒーロー志望としてその言葉遣いどうなの？自分らしさを貫きすぎじゃない？
「敵に侵入されたばかりなのに、と思うかもしれないが逆に開催することで雄英の危機管理体制をアピールするって考えらしい。警備は例年の5倍にするそうだ」
日本においてかつてのオリンピックに代わるものが雄英体育祭。中継も入り、プロヒーローも見にくるこの行事は俺たちにとって最大のチャンスと言える。体育祭でトップヒーローに見込まれれば明るい未来が待っているということだ。
「年に一回、計三回だけのチャンス。無駄にするなよ」
じゃ、とふらつきながら相澤先生は教室を出て行った。限界だったのかな？

その日の放課後。
「うーん、今ここで勝己をブチのめせば優勝ってことでいいんじゃね？」
「テメェみたいなザコブチのめしても優勝にはなんねぇから、俺にメリットねぇだろ」
「俺知ってるぞ。そうやって見下した相手に倒されて後で泣くんだ」
「お？」
「はぁん？」
体育祭が近いと告げられた日の放課後。まさに優勝決定戦が繰り広げられようとしていた。もちろん俺が世界一なので俺が勝つに決

まっているが、勝己の戦闘センスはピカイチ。まったく油断はできない。
　まぁ、こんなところでやるわけないが。
「チッ、帰るぞ」
「おう。いやぁ楽しみだな体育祭。俺イベントめちゃくちゃ好きなんだよな」
「あぁ、そんな気してたわ。バカだし」
「イベント好き＝バカって言ったのか？俺の父さんをバカにしやがって！」
「親子かよ」
　親子だが。勝己は何をわかりきったことを言っているのだろうか。
「つか、何アレ？」
「敵情視察だろ。敵の襲撃を耐え抜いた連中のツラ見に来たんじゃねぇの」
　放課後になって少し経ってから教室の前に人が群がり始めたのでずっと気になっていたが、なるべく触れないようにしていてもずっといるので我慢できずにそのことについて触れると、勝己から納得のいく返事がきた。体育祭の敵情視察ね。なるほど。
「それって個性使ってるとこ見ないと意味なくね？」
「性格見るってのも一つの手だろ。例えばバカはハメやすいからチェックしとくとかな」
「あれ、それ俺のこと？」
「あとアホ面もな」
「うぇ!?」
　唐突な流れ弾の直撃に電気がアホ面と呼ばれるにふさわしい反応をする。電気何もわるいことしてないのに。俺も悪いことしてないけど。
「まぁどっちにしろ意味ねぇからどけ。モブども」
「言い方」
　勝己はなぜこうも誰に対してでもひどい態度を貫けるのだろうか。俺は怖くてできないね。俺が口悪くなるのはムカつく相手と勝己に

対してだけだ。ムカついたら口が悪くなるのもダメな気がするけど。
「どんなもんかと見に来たが随分と偉そうだなぁ」
そんな勝己の発言に耐えかねたのか、人ごみの中から一人の男子生徒がぬっと出てきた。不健康そうな目をしたやつ。B組の人かな？
「ヒーロー科のやつはみんなこんななのか？」
「いや、こいつだけ」
「テメェも十分偉そうだぞ」
そんなことないけどなぁ。俺は世界一世界一とうるさいだけで。そう、自分でうるさいという自覚があるから偉そうではないのだ。まったく筋の通っていない理屈だがそこは気にしない。
「他の科ってヒーロー科落ちたから入ったってやつ結構いるんだ、知ってた？」
「知らなかった……」
「そういうバカなとこ見られてんだぞ。気を付けろ」
人のことバカバカって。これが俺なんだからいいじゃん。
「体育祭のリザルトによってはヒーロー科への編入も検討してくれるらしい。その逆もまた然り」
「あ、ってことはヒーロー科じゃないってことか」
「……それが？」
「いや、なんも」
まさかヒーロー科以外が堂々と喧嘩売りにくるとはって思っただけだ。よほど自分の個性に自信があるらしい。
「さっき敵情視察って言ってたけど少なくとも俺は、調子乗ってると足元ごっそり掬っちまうぞっっー宣戦布告をしにきたつもり」
「カッコいい……」
「おい」
いやこれカッコいいだろ。これで本選出場してヒーロー科倒したってなったらめちゃくちゃカッコいいじゃん。油断しないようにしないと。こういうイベントでのジャイアントキリングって本当にあるからな。ジャイアントキリングって言うと失礼か？
「いたー!!」

「あ？」
　宣戦布告してきた男子生徒のカッコよさに震えていると、また宣戦布告しにきたのだろうか、人ごみをかき分けて背の高い男子生徒が現れた。悔しいが俺より高い。もうすぐ2メートルはいくんじゃないか？
「俺、B組の夜嵐イナサっス！A組の1番ってアンタらか!?」
「俺はA組どころか世界で一番の須一一成！こいつは俺の次にすごい爆豪勝己だ！」
「世界で一番！それは負けられないっスね！」
「うるせぇのが増えやがった……」
　ずいぶん気のいいやつだ。こういうやつがいるって知っていたらもう少し早く友だちになったのに。あとうるせぇのって、俺そんなにうるさくなくない？
「ってかなんで俺が一番だって知ってたんだ？」
「俺が一番だろが、コラ」
「世界一世界一うるさいって有名なんで！」
　どうやら俺はうるさいらしい。そんなことより有名であることを喜ぶべきか。英雄というのは学生時代から多くの偉業を成し遂げるって聞くし、これもその一部だろう。入学して少しで有名になる男。なんてすごそうな男だろうか。
「体育祭、お互い頑張ろう！」
「俺が一番だ！」
「けっ」
　差し出された大きな手をがっしりと握る。こういうやつとは体育祭後半でやりあいたいな。そっちの方が燃える。実力未知数なライバルってそれだけで燃えるし。俺が勝つに決まってるんだけどね？
「さぁバクゴーも！」
「しねぇよ。煽られてぇのか」
　俺との握手をやめて今度は勝己に差し出すが、勝己はその手をとらず人ごみをかき分けて行ってしまった。ったく、あいつは言葉足らずなところがあるからいけない。ここは俺がフォローしておいてやろ

う。
「悪いな。アイツ自分が一番になるに決まってるって思ってるから。俺が一番に決まってるのに」
「それで煽られてぇのかって……よぉし！絶対俺が一番になるっス！」
「んだと!?俺が一番に決まってんだろ！」
「いいや、俺っス！」
「俺だ!!」
「俺に決まってんだろが!!」
一番になると叶いもしない夢を語りだしたイナサと言いあっていると、遠くから勝己の声が聞こえた。君一番への執着凄すぎじゃない？
とりあえず勝己が俺たちの話を聞いていたということは俺を待っているということなのでイナサと途中からぽけーっとし始めた宣戦布告くんに別れを告げ、勝己を追いかけて行った。隣に並んだ瞬間「俺が一番だ」と言いやがったこいつに、「あほか」と返すと再び喧嘩に。どうして俺たちはこうなのだろうか。

体育祭の準備。体育祭が年に一回のチャンスである以上、これをしっかりしないやつなんていないだろう。頭がぶどうみたいになっている実でさえ、「表彰台に立つ練習したぜ！」と言っていたのだ。みんなやる気は十分だと言える。
さて、俺はと言えば。
「根性が足らん！根性が！」
プロヒーローである父さんにしごかれる毎日を送っていた。
「いいか！お前の『スイッチ』は使う度に負担が増えていく！ということはお前に必要なものはその負担に耐えうる肉体及びスタミナ、精神力！つまり根性だ！お前には根性が足らん！」
「助けて……」
体育祭あるから特訓付き合ってくれない？と言ったのは俺だが、こ

の人根性根性とうるさい。根性しか言わない。いや、突き詰めていけば最後は精神論にはなるが、俺は突き詰める段階まで至っていないわけで。なんか個性が成長するヒントとかさ。そういうのない？

「だから俺はこう考えた！等間隔でスイッチしながら筋トレを行い持久力を向上させる！そうすれば負担に慣れるだろう！危ないなぁと思ったら止めるから安心してやるといい！モード『ｐｏｗｅｒ』から！せーの」

「脳と体がっ、死ぬっ！」

父さんに特訓を頼んだその次の日から、俺は体をバキバキに、脳をボロボロにしながら学校に通う毎日が続いた。これで手ごたえがなければ文句を言ってやるのだが、不思議と手ごたえがあるので何も言えないのである。流石世界一の父親。でももう二度と特訓は頼まない。

第１２話　第一種目、障害物競走

雄英体育祭、本番当日！

「ついにきましたね。俺が一番になる日が」

「未来永劫こねぇよ。そんな日」

体育祭当日、控室で一回戦が行われようとしていた。未来永劫こない？許さんぞこいつ。

「まーまー言わせておいてやるよ。数時間後には俺が表彰台で一番高い位置にいて、勝己はよくて二番」

「カス」

「あの、もうちょっと構ってくれね？」

いつもの調子のいい罵倒が飛んでこなかったので肩を叩いても、勝己は完全に無視を決め込んでいる。体育祭前だから集中したいのかな？こいつはいつでも俺が一番だと余裕ぶちかますタイプだと思ってたが、意外に集中するタイプなのか。邪魔すると後が怖いので、ここは引いておこう。

いやしかし、柄にもなく緊張してくる。今までの行事は特に将来も何も関係なかったからのびのびとやれたが、この体育祭は将来が決まると言っても過言ではない。多くのプロヒーローが見に来て、生徒一人一人に注目する。特に今年はＵＳＪの襲撃があったから、１年ステージの見学も多いことだろう。つまり、これはチャンス。

緊張して自分の実力を発揮できないのはもったいない、つまらない。全力で楽しんで優勝しよう。そうしよう。

「みんな！入場だ！」

委員長である天哉が入場の時間がきたことを教えてくれた。真面目な人がいるとこういう行事ごとで遅れることがなくなるからものすごくありがたい。人の話は基本的に聞いているが、時々聞き漏らしてしまうことがあるからどうしても甘えてしまう。

クラス全員で入場ゲートに向かう。一歩一歩歩くごとに沸きあがってくる高揚感。緊張してるって言ったが、アレ嘘だ。俺は今世界一ワクワクしている。

『雄英体育祭！ヒーローの卵たちが我こそはとしのぎを削る年に一度の大バトル！』
　プレゼント・マイクの声が聞こえてくる。あの人お祭りにめちゃくちゃ向いてるよな。実況にうってつけすぎる。会場を沸かせることなんて朝飯前だろう。入試の時は別として。
『どうせテメーらアレだろ!?こいつらだろ!?敵の襲撃を受けたにもかかわらず、鋼の精神でそれを乗り越えた期待の新星!!ヒーロー科!!1年!!A組だろぉお!!?』
「めっちゃ持ち上げてんじゃん！」
「嬉しそうにしてんなー、須一」
　抑えきれないワクワクが顔に出てしまっていたのか、電気に呆れられながら言われてしまった。見ると、少し強張った表情をしている。普段何も考えていないようなアホ面をしているくせに、緊張はするらしい。
「いやさ、やっぱワクワクすんのよ。こんなデカい場所で一番になれたらって思うと」
「緊張とかしねぇの？」
「しねぇってことはないけど、やっぱりワクワクが勝つ。圧倒的に」
「……そっか！だよな！」
　俺の言葉を受け、電気はいきなり元気になって俺の背中を叩いてきた。なんのこっちゃ。
　選手全員の入場が終わり、ミッドナイトが朝礼台に上がった。１８禁なのにもかかわらずなぜ高校で教師をやっているのだろうか。健全な男子としてはありがたいのだが、保護者から苦情がこないか心配である。
「選手宣誓！選手代表、爆豪勝己!!」
「俺じゃない……？」
「お前入試一位通過じゃないだろ」
　勝己の背中を見ながら俺が選手代表でないことに呆けていると、鋭児郎が信じられない事実を告げてきた。いや、知ってたけど。あいつが一位だってことが何かの間違いで、実は俺が一位でしたってなって

ると思って。それはない？あ、そう。
「せんせー」
　勝己はポケットに手を突っ込んだまま、やる気なさそうに宣誓を始めた。こういうときくらいきちっとしない？しないのが勝己らしいといえばらしいのだが、俺ならもっと選手代表らしく宣誓ができるというか、今から俺に代わらない？
「俺が一位になる」
「調子乗んなよＡ組オラァ!!」
「一位になんのは俺だっつってんだろうがゴミが!!」
「この状況で一位になるって言うってどういう神経してんだ須一！」
　思わず飛び出そうとしたが鋭児郎に羽交い絞めにされて止められてしまう。どうか離してほしい。あのわからずやにわからせてやらねばならないんだ。あ、実際に俺が一位になればいいのか。そうすればあいつは一位になるって言うだけ言ってなれなかった恥ずかしいやつになる。俺もなれなかったときはそうなるけど。
「さーてそれじゃあ早速第一種目行きましょう！運命の第一種目！今年は……コレ!!」
　ミッドナイトが示した先には、障害物競走という文字。なるほど、障害物競走。体力を使いそうな競技は後々のことを考えると体力的に大体不利なのだが、やはり不利な競技がきてしまったようだ。ここは何とかスイッチを多用せず行かなければならない。
「計１１クラスでの総当たりレースよ！コースはこのスタジアムの外周約４キロメートル！コースさえ守れば何をしたってかまわないわ！」
　４キロなら問題ない。スイッチを多用しなければ十分体力は残る。注意すべきは何をしたってかまわないというルール。これは妨害行為も全然オッケーという意味だろう。俺の個性は全体的な妨害には向いていないので、妨害は考えずただただゴールすることを考えた方がいいかもしれない。
「さぁ行くわよ。よーい、スタート!!」
「スイッチ。モード『ｓｐｅｅｄ』！」

スタートの合図と同時に前にいた人を踏みつけ、人の肩を足場にしながら前に進む。めちゃくちゃバランスがとりにくいが、狭いスタートゲートを最速で切り抜けるにはこれしかない。
「って、風!?」
スタートゲートを通ったところで、風に背中を押された。こんなところでこんな強風は起こらないはず。なら、誰かの個性？
「すごいな、アンタ！世界一って言うだけはある！」
「イナサ！」
後ろを見ると、すぐそこまでイナサが迫っていた。少し後ろには焦凍がおり、後ろにいる選手を凍らせている。危なかった。スタートが遅れてれば俺もああなっていたかもしれない。
「ただ、負けないっス！一番になんのは俺っスから！」
「んだと!?俺だ！」
「俺っス！というか、前！」
「あ？」
隣にきたイナサと言いあっていると、突然前を向けと言われた。罠かもしれないがこいつはいいやつなので素直に前を向くと、
『さぁ初めの障害物！第一関門、ロボ・インフェルノ！』
「入試のときの仮想敵！」
「入試？」
「ほら、実技でやっただろ！……ん？さてはイナサ、推薦組か!?」
「推薦一位っス！」
「一位だからって勝った気でいんじゃねぇぞちくしょう！スイッチ。モード『ｊｕｍｐ』！」
捨て台詞を残し、モード『ｊｕｍｐ』になってゼロポイント仮想敵の上に着地する。地上は仮想敵がいすぎてダメだ。いけるかもしれんが確実に怪我する。
「姿がコロコロ変わるな！個性複数持ちっスか？」
「はぁん!?」
モード『ｊｕｍｐ』でロボ群を跳び抜けようとしたその時、下からイナサが上がってきた。風に関する個性だとはわかっていたが、こい

つ空も飛べるのか？推薦一位は伊達じゃないということか。
「俺の個性は色んなモードがあって、そのモードに合わせた力を発揮する！今の俺は世界一跳ぶ男！」
「世界一か！すごいな！」
　褒めてくれたイナサに「ありがとう！」と返し、ゼロポイント仮想敵からゼロポイント仮想敵に跳び移って、最後のゼロポイント仮想敵を駆け下りてロボ・インフェルノを抜けた。地上に降りるとイナサは目に見える範囲ではあるが、結構前に行ってしまっている。
「待てやコラ！」
「スリムになった！面白いな！」
　モード『ｓｐｅｅｄ』にスイッチしてイナサを追う。最高速は俺の方があるらしい。風を操って飛べるとはいえ、繊細なコントロールが必要なのだろう。イナサがもっと個性を伸ばせば、俺ですら追いつけなくなるかもしれない。その頃には俺も個性を伸ばし、もっと速くなっているに決まっているが。
「んで、第二関門……マジかよ！」
『第二関門、ザ・フォール！』
　第二関門は超危険な綱渡り。足場から足場へと綱が渡っており、少しでもバランスを崩せば真っ逆さま。あれ落ちても平気だよね？死なないよね？
「じゃあお先！」
「クソッ、乗せてけ！」
　空を飛べるイナサは綱渡りなど知ったことかと、第二関門を越えていく。流石にこれをモード『ｊｕｍｐ』だけで越えていくのはきつそうだ。助走をつけなければ足場から足場へ移れないだろう。となれば、
「スイッチ。モード『ｓｐｅｅｄ』！」
　モード『ｓｐｅｅｄ』にスイッチし、踏み込みのタイミングで、
「スイッチ。モード『ｊｕｍｐ』！」
　モード『ｊｕｍｐ』にスイッチして跳ぶ！これを繰り返せば早めに越えられるはずだ。

『先頭二人難なく越えていくー!!』
『一人は実際に空を飛んで、もう一人も飛んでるようなもんだからな』
『だが油断はできないぜ先頭二人！後方に迫るは轟焦凍ー！』
　第二関門を抜けて走っていると、プレゼント・マイクの実況が耳に入った。そうか、俺の後ろに焦凍がいる、と。どうやらゆっくりしすぎたらしい。やはり第二関門で手こずったからか。
「追いついたぜイナサ！」
「やっぱ速ぇ！いい個性っスね！」
「お前もな！」
『さぁー最終関門！その実態は一面地雷原！怒りのアフガンだ！地雷の位置はよく見りゃわかるようになってんぞ！目と脚酷使しろ！』
「お先！」
「待てやコラァ!!」
　また飛んで行こうとしたイナサの足を掴む。流石にこうも近くで見続けたら挙動がわかってきたぞ。このまま行かせてたまるかってんだ！
「あ」
「お」
　ニヤリと勝ち誇ったのも束の間。
　走った勢いのまま足を掴んだ俺と、足を掴まれて引っ張られたイナサは地面へと倒れ込んだ。そしてここは一面地雷原。
　結果。
「スイッチ。モード『ｈａｒｄ』！」
「あっ、ずる」
　ずるい、と言い切る前にイナサは吹き飛ばされていった。ごめんね。
　モードを解除し、さて、と走りながら考える。確かに見ればわかるが、確認しながらチマチマいけば追いつかれてしまう。なんとか速く抜ける方法はないだろうか。
「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!」
　そうやって考えていた俺の耳に、ここ最近で聞きなれたアイツの声

が届いた。
「一位になんのは俺だぁぁぁぁ!!」
「いや、俺だ」
「勝己に焦凍!もうきたのか!」
後ろを見るとすぐそこに勝己と焦凍。そういえば勝己も飛べるからここは楽に抜けられるのか。今は焦凍の妨害があって前に行けない状態になっているが、俺の近くにきた今二人の矛先が俺に向かってきてもおかしくない。今俺が一位だし。
だったらここから一人だけ抜ける方法を考えなければならない。二人を出し抜いて、俺だけ一人抜ける方法。
ここで俺は、ふと地雷が目に入った。確か光と音はすごいが、威力はそこまでだったか。だがイナサが吹き飛んでいたということは人を吹き飛ばす力はあるということ。あれ?地雷が起爆する瞬間に前に跳べたらそのまま前に飛ばされね?いけんじゃね?
正直、これは博打だろう。戦闘訓練の時に焦凍の氷結のタイミングに合わせてジャンプができなかった男だ。地雷を踏んだ瞬間に跳ぶなんて真似ができるとは思えない。そう、地雷の場所がわからなかったなら。最終関門は地雷の場所がわかるように設置されており、意図的に踏むことができる。それはつまり、タイミングを合わせるのは普通の地雷より簡単だということだ。
「スイッチ。モード『ｓｐｅｅｄ』!」
モード『ｓｐｅｅｄ』にスイッチし、一気に最高速。そして目の前の地雷を踏む瞬間に、モード『ｊｕｍｐ』にスイッチ。そして、地を蹴ると同時に前へ跳躍!
その瞬間、俺はゴミのように吹き飛んだ。不格好なゴールにはなるが、これで俺が一位通過できるに違いない。そう思っていたその時。
『Ａ組緑谷爆発で猛追!っつーか……抜いたー!!』
「は?」
背後で大きな爆発音が聞こえたかと思えば、プレゼント・マイクが出久の追い上げの実況。いや、俺は抜かれていない。まだ大丈夫だ。このまま俺が一位で通過できる。

そう思っていたところに、また爆発音。それが聞こえたかと思えば。
「出、久」
入試の時に見た、あのもじゃ毛が俺の前にいた。
「な、に抜いとんじゃコラァァァァァァァ!!!」
『さぁさぁ序盤の展開から誰が予想できた!?今一番にスタジアムに還ってきたその男、緑谷出久の存在を!!!』
「最後の、最後で……」
出久の後にゴールゲートを抜けた俺は、出久を見た。客席に向かってガッツポーズをしているのは、あそこに出久の師匠的な人がいるからだろうか。ここからはよく見えないので推測しかできない。
ただ、一つだけわかったことがある。
「個性使わず俺に勝ちやがって！舐めプしてんじゃねぇぞコラ!!」
「ひぃっ！かっちゃんがうつってる!?」
出久に詰め寄ると、聞き捨てならないことを言われてしまった。うつってるって。勝己病気かなんかか。
体育祭第一種目障害物競走は、二位通過に終わった。

第１３話　第二種目、騎馬戦

「予選通過は上位４４名！次からはいよいよ本選よ！ここからは取材陣も白熱してくるから気張りなさい！さーて、第二種目は……コレ!!」

「騎馬戦……」

ミッドナイトが示した先には騎馬戦の文字。個人競技じゃないのか。

ミッドナイトの説明によると、選手は２～４人のチームを自由に組んで騎馬を作る。基本的には普通の騎馬戦と同じルールだが、一つ異なることがあり、それは第一種目の結果に応じたポイントが各選手に振り当てられること。４４位から５ポイントずつ増えていき、なんと１位には１０００万ポイント。確実に狙われることだろう。羨ましい！

俺は２位だから２１５ポイントか。二番目に高いポイントであるはずなのにしょぼく見える。１０００万はやりすぎだと思うんです。

制限時間は１５分で、振り当てられた合計のポイントが騎馬のポイントとなり騎手はそのポイントが表示されたハチマキをつけ、制限時間終了までハチマキを奪い合う。ハチマキは首から上につけ、更に重要なのはハチマキをとられても騎馬が崩れても失格にはならないということ。ただし個性はアリだが騎馬を崩す目的の攻撃をすると退場となる。

「それじゃ今から１５分！チーム決めの交渉タイムスタートよ！」

「須一！」

「うおっ！」

ルールを確認しながら誰と組むか考えていると、交渉タイムスタートと同時にイナサが声をかけてきた。どうした第一種目５位。言っとくが俺は謝らんぞ。

「俺と組もう！」

「え？いいのか？」

「いいのかって？」

イナサの提案に首を傾げ、そんな俺を真似してかイナサも首を傾げる。いやだって。
「ポイント数多いもの同士で組むと、いざハチマキを取られたときに上位になれなくなるぞ」
「取られなきゃいいっス！」
「それもそうだ！」
イナサと肩を組んで笑いあう。まさかこんな天才が雄英にいたとは思いもよらなかった。こいつは俺と張り合うレベルの天才だ。これはもう上位に食い込むのは確定だな？
「それに、こっから先あると思うんスよね！ガチバトル！そこでアンタと戦ってみたいんだ！」
「何？負けたいって？」
「自信満々っスね！でも勝つのは俺だ！」
さて、後は二人か。勝己を誘うのは確定として、後は誰を……。
「須一くん！」
「お？」
とりあえず勝己を探そうときょろきょろしていると、出久が声をかけてきた。やだ、俺モテすぎ？女の子から声がかからないのが気になるところだけど。
「出久にお茶子ちゃん。どったの？」
「チームを組んで欲しいんだ。作戦があるんだけど」
「いやです!!」
「えぇ!?」
作戦を説明しようとした出久を遮って腕でバツを作る。確かに１０００万というポイントは魅力的だが、出久とは組みたくない。
「そうだよね……１０００万保持するより終盤になって取りに行った方が」
「そうれもそう。でも出久と組みたくないのは第一種目の成績が俺より上だから！俺よりすごいやつと組むのは俺が一番じゃないってことを認めるみたいでいやなんだよ！」
「細かっ！でも一番を取りに行きたいってのはわかるっス！」

これは俺のプライドの話だ。一番にこだわるものとしてそこは譲れない。
「でも須一くんの力があれば確実に次へ進める！というか須一くんじゃないとダメなんだ！どんな状況にも対応できるオールラウンダーで、一番になるなら絶対に欲しい人だ！それに須一くん、一瞬でも一番を譲るのってらしくないんじゃない!?」
一番を譲る。それは騎馬戦開始時点で出久のチームが一番だからってことか。なるほど。でも結果的に一番になればいいんだから別に……。
「乗った！最初から最後まで一番になんぞコラ!!」
「俺アンタの扱い分かってきた気がするっス！単純！」
「ありがとう須一くん！」
「あのあのデクくん。須一くんの後ろにおるごつい人は？」
「え？あ」
今気づいた、と言わんばかりにイナサを見る出久。そこまで俺に夢中だったのか。照れるぜ。
「俺は須一に一足早く声をかけてチームを組ませてもらった夜嵐イナサっていうものっス！個性は『旋風』！風を自在に操ることができて、飛ぶこともできる！」
「すごい！ということは麗日さんの個性で僕らを軽くすれば全員飛ばせたりするの？」
「任せろ！」
「うわぁ、僕と組んでもらうのが申し訳なくなってくるチームだ……」
確かにイナサの個性とお茶子ちゃんの個性は相性抜群といえる。イナサの精密さがあれば軽くなった俺たちを飛ばすことなど造作もないだろう。考えれば考えるほど凄いやつだ。
「それで、騎手を誰がやるかなんだけど」
「俺！」
「俺っス！」
イナサと睨みあう。どういうつもりで騎手をやりたいって言ってんだ？

「いいかイナサ。俺にいい作戦がある。これを聞くとお前も俺に騎手を譲りたくなることだろう」
「ふむふむ」
　俺の作戦はこうだ。
「お茶子ちゃんの個性で軽くなった俺をイナサの風で操り、飛び回りながらハチマキを奪いつくす」
「それだ！」
「まってまってまって！」
　イナサが俺の作戦に同意して固い握手を交わしたところで出久から待ったが入る。俺の作戦に不満があるのだろうか。こんなに素晴らしく完璧な作戦だというのに。
「僕も須一くんが騎手をやるっていうのには賛成するけど、その作戦は須一くんがほとんど無防備になるからダメだ。基本的には騎馬の状態を保ったまま、危なくなったら夜嵐くんの個性で回避するのが一番いいと思う」
「それ逃げるってことか？」
「もちろん取れると思ったハチマキは取ってほしい。というか、逃げ続けるのって須一くんは我慢できないだろうから」
「んー、まぁこれはチームの勝利を目指すもんだからいいと言えばいいけど、面白くないっていうか」
「いやなんやね」
　そういうことですお茶子ちゃん。やっぱり騎馬戦やるなら取りに行かないと。そうした方が観客も盛り上がるだろうし。なんかあれじゃん。逃げ続けるトップって見てて楽しくなくない？
「あとは騎馬をどう組むかだけど、後ろに夜嵐くん。僕と麗日さんのどっちかが前になるけど、それは僕が行くよ」
「イナサが後ろってのは周辺警戒がしやすいからか？」
「そう。あと須一君を飛ばすときに後ろの方がいいと思って」
　なるほど。確かにイナサが先頭にいると振り向かなきゃ俺のことが見えないが、後ろにいれば常に俺のことが見える。風で飛ばすときは対象が見えていないよりも断然見えていた方がいいだろう。

「このチームなら確実に第二種目を通過できると思うけど、油断だけはないように。常に警戒していこう！」
いつもおどおどしているかと思えば、ふと気づけば男らしい顔をしている。入試のときも思ったが、本当によくわからないやつだ。
お茶子ちゃんの個性でお茶子ちゃん以外を軽くしてスタンバイする。この時点で俺たちに視線が向いているのは気のせいじゃないだろう。そりゃ１０００万以上のポイントを稼げるんだから狙いにくるよな。騎手の俺は責任重大だ。
「基本的には出久が指示出してくれ。危ない時は勝手に動く」
「うん。わかった」
悔しいが、瞬時の状況判断、思考能力なら出久の方が上だろう。それに１０００万を背負っているなら勝手に動くなんて真似冗談でもできない。確実にとれるハチマキを取り、後は逃げに徹する。それがチームとして一番になる確実な道だろう。
『よぉーし組み終わったな！準備はいいかなんて聞かねぇぞ！いくぜ！残虐バトルロイヤルカウントダウン！3、2、1！』
「んじゃ、よろしく」
『スタート!!』
「実質１０００万ポイントの争奪戦だ！」
「須一くん頂くよー！」
「夜嵐くん！お願い！」
「オッケーっス！」
スタートと同時に取りに来た二組から逃げるためにイナサが個性を使って俺たちを宙へと運ぶ。今体が軽くなっているからか、まるで風になったかのような気分だ。
「さぁ着地するっスよ！下にいるみなさんお気をつけて！」
二組から逃げ比較的誰もいないところにホバリングの要領で着地する。着地時には周囲に風を巻き上げるため容易に近づくことはできない。まさに無敵の移動要塞である。
「騎馬戦の機動力じゃねーってこれ！」
「すごいよ夜嵐くん！」

「それほどでも!!」
「みんな前!障子くんがきてる……けど、一人!?」
　お茶子ちゃんと二人でイナサを褒めていると出久から報告が飛んできた。前を見ると目蔵がこちらに向かって走ってきている。一人に見えるが、あれは恐らく。
「触手腕の中!多分実か梅雨ちゃんがいるぜ!騎馬の三人は足元気を付けてくれ!丸っこいやつが飛んで来たら触らねぇように!」
「この俺の足にくっついてるやつ?」
「バカイナサ!!」
　イナサを叱責したのも束の間、目蔵の方から俺のハチマキを狙って何かが伸びてきた。避けながらそれを見てみると、ピンク色の……。
「梅雨ちゃんもか!」
「さすがね須一ちゃん……!」
「ありがとう!イナサ、もういけるか!?」
「いけるっス!さようなら俺の靴!」
「二人とも強いはずやのに、このドタバタ感……」
　仕方ない。イナサは実の個性を知らなかったんだし、俺も注意するのが遅れ、出久は気づくのが遅れた。ただこういう状況からでも逃げられるくらいの力を持ってるってことでここは納得してくださらない?
「調子のんなや須一!!」
「その声は!」
　このまま悠々と空の旅を楽しもうかと思っていたところに、なぜか懐かしく感じるあの声が。そう、我らがクソヤンキー、勝己その人である。
「組む相手間違えたな!!死ねや!!」
「俺に障害物競走で負けた気分はどうですかぁ?」
「」
　あ、キレた。
「須一くん!大丈夫!?」
「おう!イナサ、気にせず頼む!」

「ファイトっス！」
　確か、出久が言うには勝己は右の大振りが大好きなんだったか。
「んなっ」
「ビンゴ！スイッチ。モード『ｐｏｗｅｒ』！」
　出久の情報通り右の大振りがきたため、それを掴んでモード『ｐｏｗｅｒ』にスイッチする。そして勝己の騎馬の頭上目掛けて勢いよく勝己を放り投げた。
「範太！しっかりキャッチしろよ!!」
「マジか」
　なるほど。空中で動き回れる勝己が好き勝手取りに行って、範太が回収するっていう感じか。三奈ちゃんがいるのは恐らく焦凍対策で、鋭児郎は根性で選んだのだろうか。勝己はみんなの個性を知らないからちゃんとチームを組めるか心配だったが、みんなの方からアピールしてくれたようで一安心。まぁ勝己は誰とチームでも通過してくるだろうが。
「かっちゃんを投げ飛ばすなんて……」
「出久が勝己のクセ教えてくれたからだぜ。じゃなきゃあんな戦闘センスお化け、不安定な状態で相手できねぇって」
『さぁここで７分経過した現在の順位を見てみよう！……って、あら？Ａ組須一以外パッとしねぇ!!てか爆豪ゼロポイント!?』
「何ッ!?」
「さっきの着地のスキを狙われたんだと思う」
　まさか勝己がハチマキを取られるとは。いや、俺のせいかもしれんが。どちらにせよ勝己はハチマキを取り返して上がってくるだろうから気にしなくていいか。むしろあいつの性格上取られたものを取り返しに行くだろうから、しばらくこっちにこなくなってラッキーだ。
「これは逃げ切りがやりやすそうだね。みんな、今まで通り……っていうわけには」
「いかなそうじゃね？」
　残り半分を切ってこのまま逃げ切れるかと思えば、俺たちの正面に

焦凍のチームがやってきた。どう見ても取る気満々である。
「貰うぞ、それ」
「誰がやるか！大人しく負けてろ！」
やる気満々な焦凍に、俺は迷わず中指を立てた。